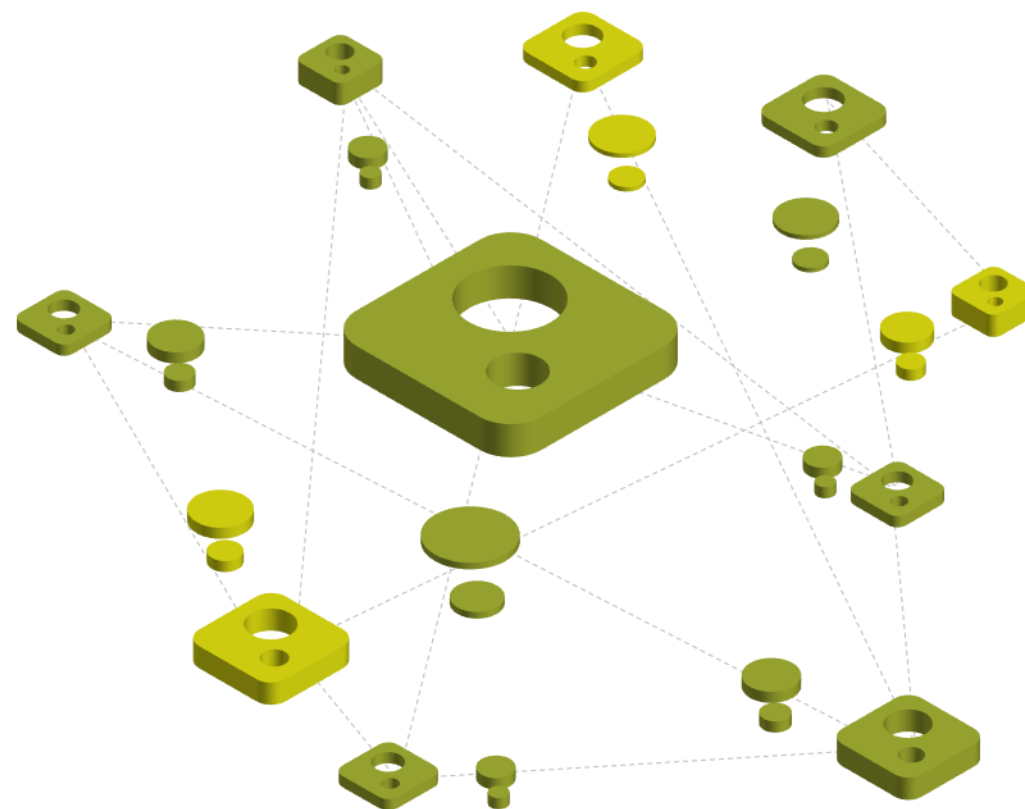


2026年12月期 第2四半期 決算説明資料

株式会社ZenmuTech

2026年8月
東証グロース市場（証券コード：338A）



2026年12月期
第2四半期
決算概要

受注の後ろ倒しにより、売上高・利益ともに上期計画に届かず

- 売上は前1Qのフロー案件増加の反動減で横ばい
- 営業利益は人材投資増により減益

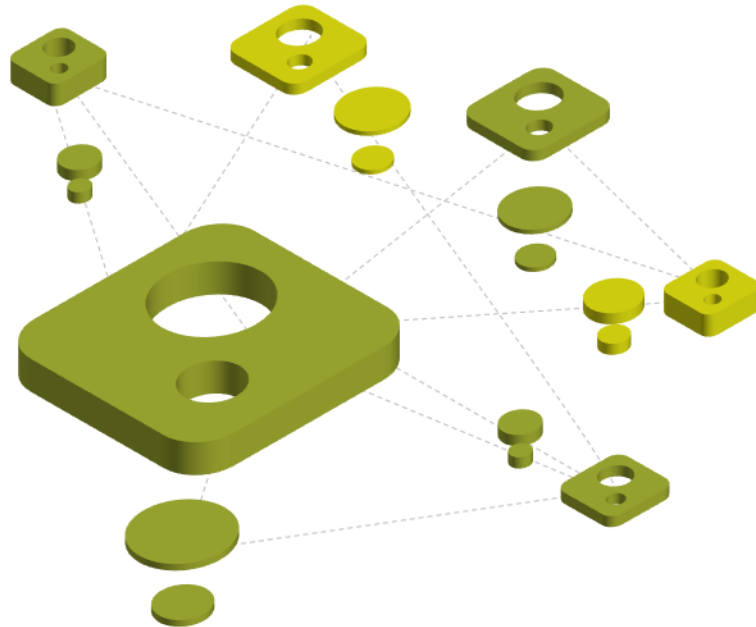
2026年12月期
通期業績予想

売上高は対前期比+26.8%の1,080百万円
営業利益は対前期比+12.6%の161百万円

- 売上・利益ともに**下期偏重の計画**

成長戦略

秘密計算ソリューション「QueryAhead®」のPaaS型継続課金モデルへの転換に向け、持続的な成長基盤の確立を目指す



1. 2026年12月期 第2四半期 業績概要

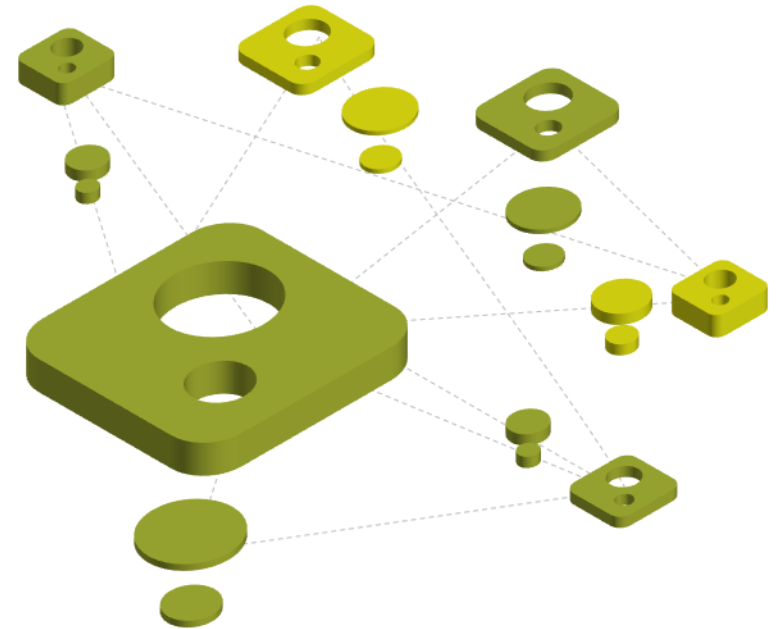
2. 2026年12月期 業績予想

3. 成長戦略

Appendix

- ・ 会社概要
- ・ カンパニーハイライト

1. 2026年12月期 第2四半期 業績概要



2026年12月期 第2四半期 業績概要

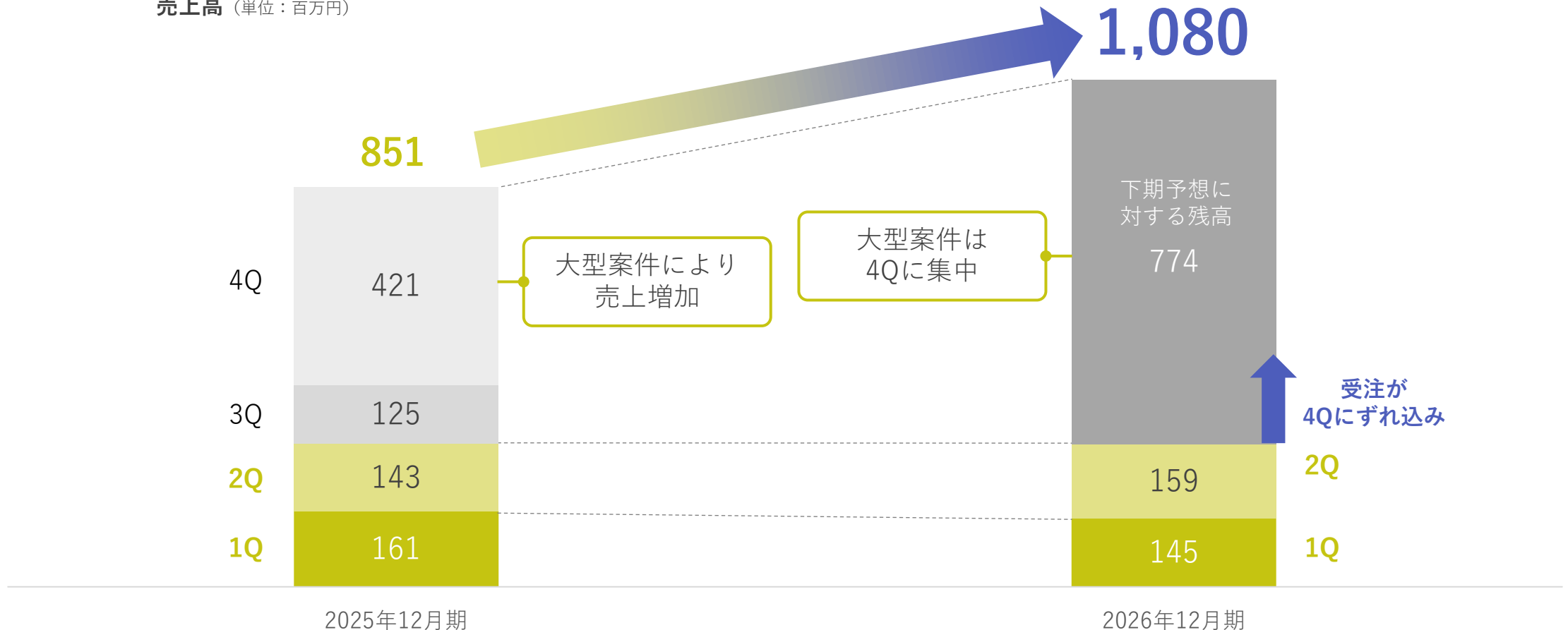
売上高は、第2Qに予定していた受注が第4Qにずれ込んだ影響に加え、前1Qに通常を上回るフロー案件が発生した反動で、前年同期比微増収。営業利益は、将来の成長に向けた人材投資等が増加し、前年同期比減益。

(単位：百万円)	2025年12月期 2Q	2026年12月期 2Q	前年同期比		2Q 期初予想値
			額	率	
売上高	304	305	+1	+0.3%	377
売上原価	40	34	△5	△12.9%	-
売上総利益	264	270	+6	+2.3%	-
販管費	288	369	+81	+28.2%	-
営業損益	△24	△99	△75	-	△71
経常損益	△18	△79	△60	-	△52
中間純損益	△13	△60	△46	-	△43

2026年12月期 業績計画と第2四半期進捗状況

大型商談予定時期の偏り、成長投資による費用先行、ならびに一部受注の第4Qへのずれ込みに伴い、売上・営業利益ともに下期偏重の見通し。人員増強・体制強化を進め、下期は、各案件を確実に履行していく。

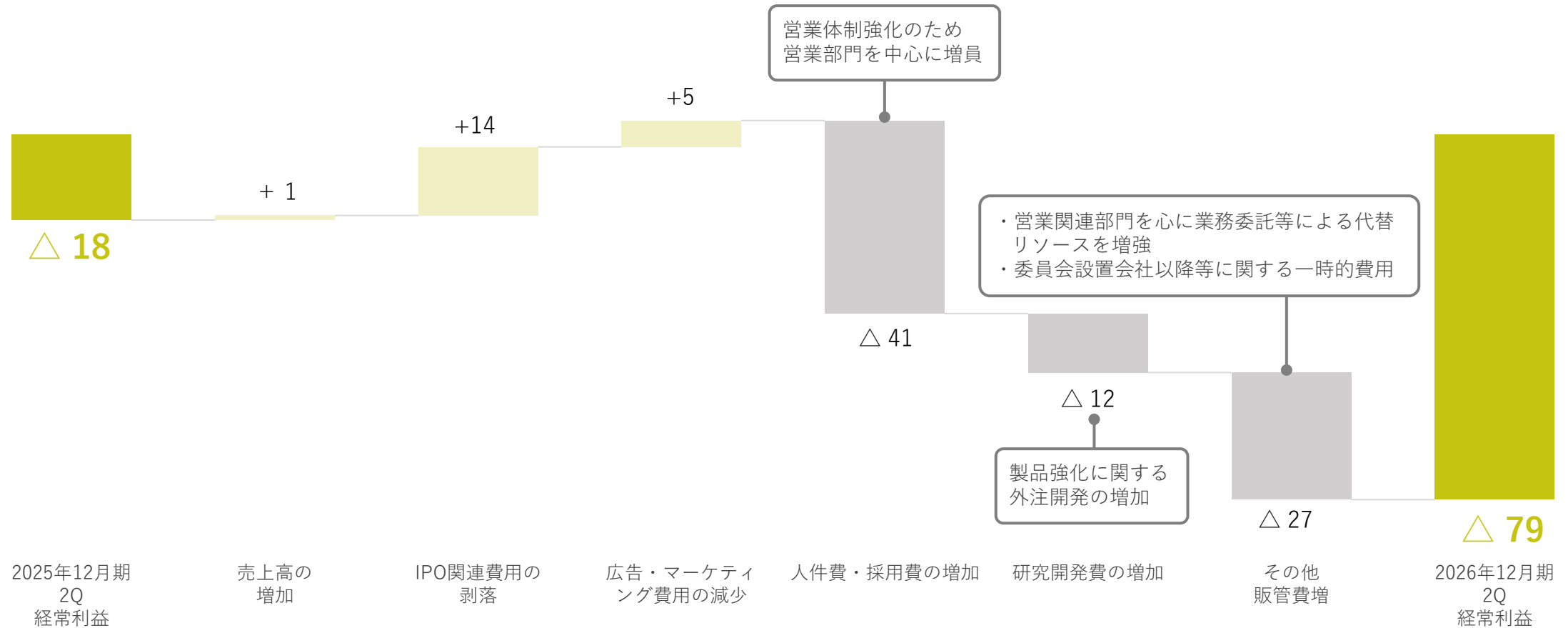
売上高（単位：百万円）



経常利益 増減分析

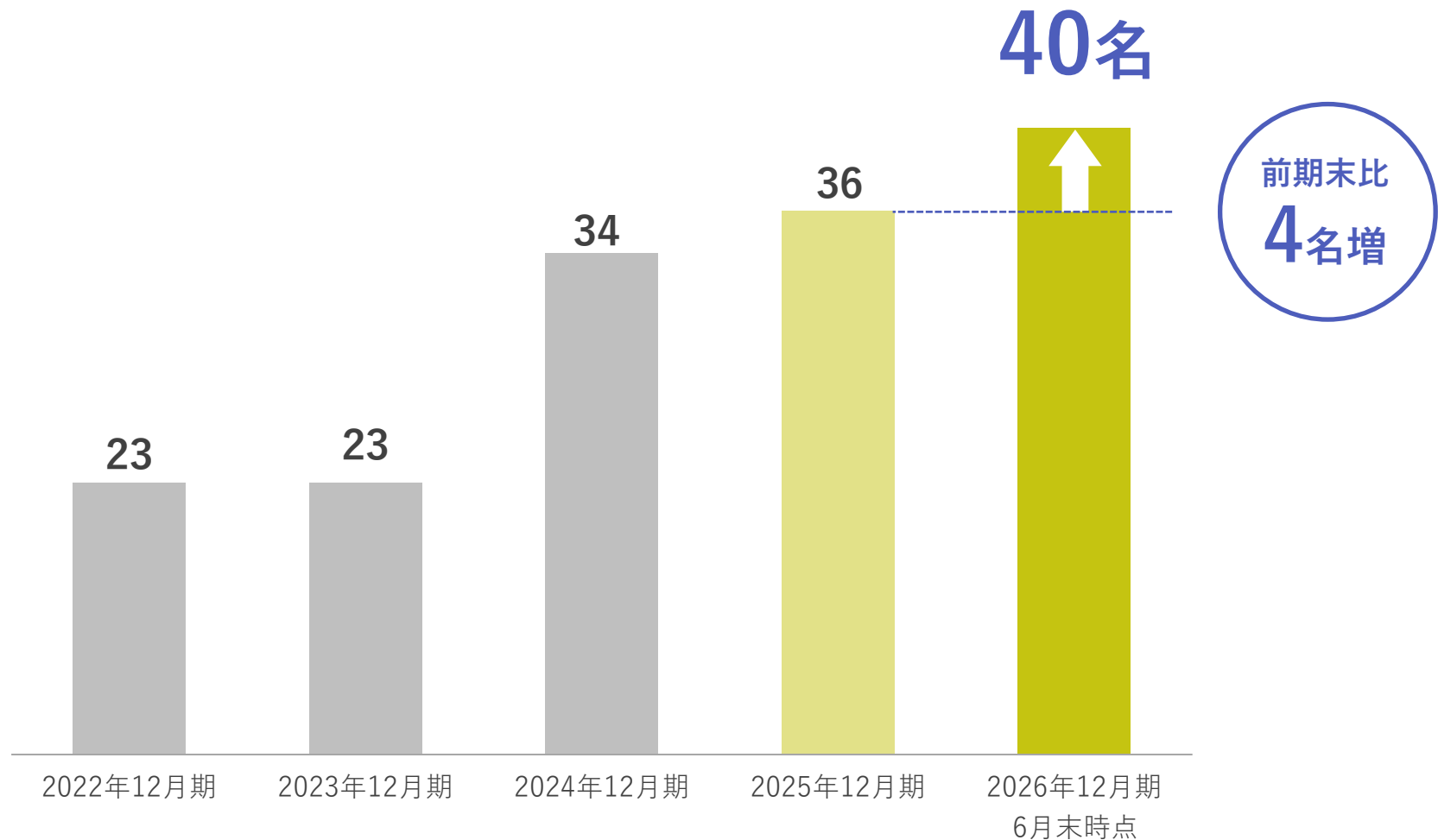
営業部門を中心とする人員・外部リソースの拡充に加え、製品強化に向けた外注開発が先行。

(単位：百万円)



人員数 推移

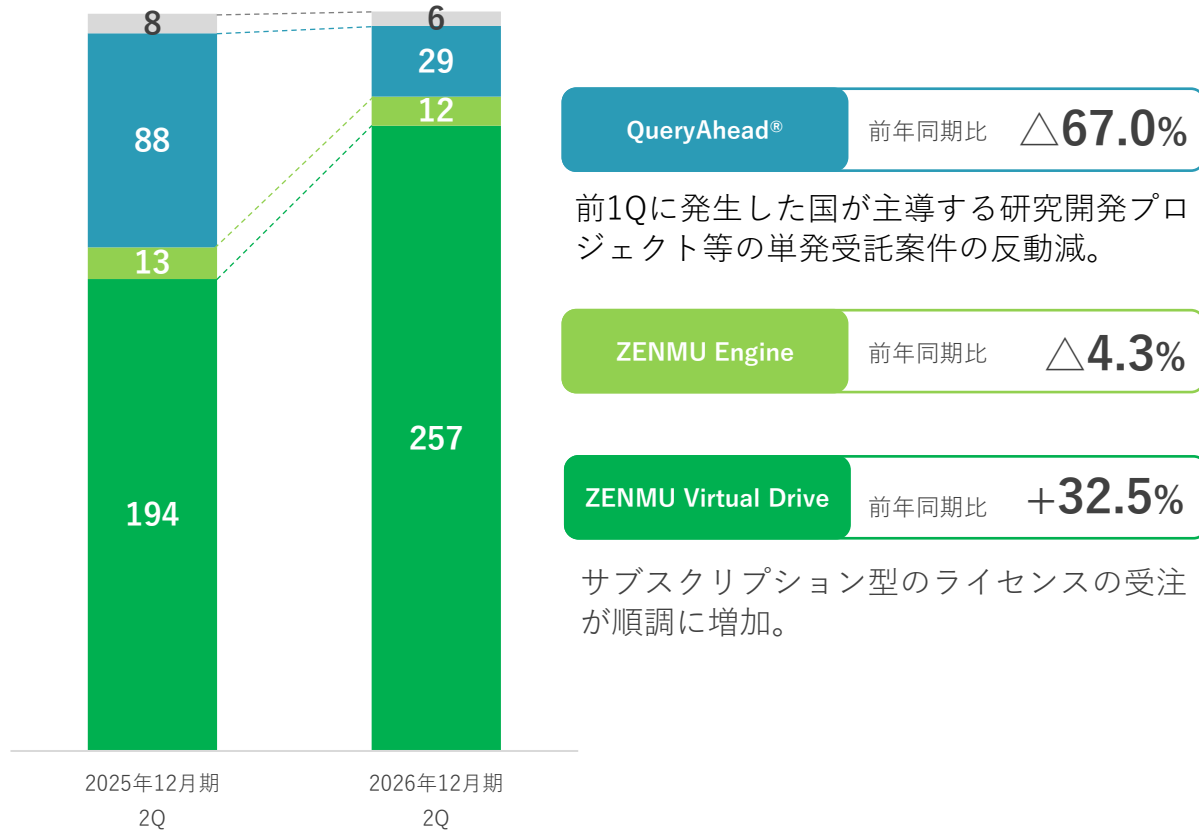
営業体制の強化および拡大する需要へ着実に対応する体制を構築するため、前期末から人員を4名増員。
下期に予定されている大型案件を含む各種受注にも、十分に対応可能な体制を整備。



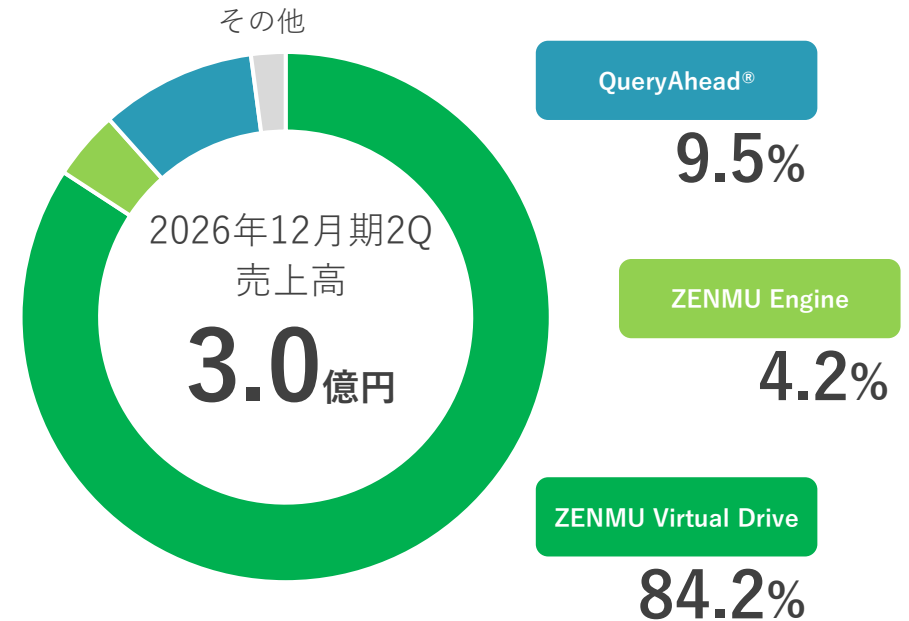
ソリューション別 売上高・構成比

Query Ahead®は前年の単発受託案件の反動で減収も、売上高の8割以上を占める主力のZENMU Virtual Drive は、サブスク受注の伸長により、32.5%の大幅増収。

ソリューション別 売上高 (単位：百万円)



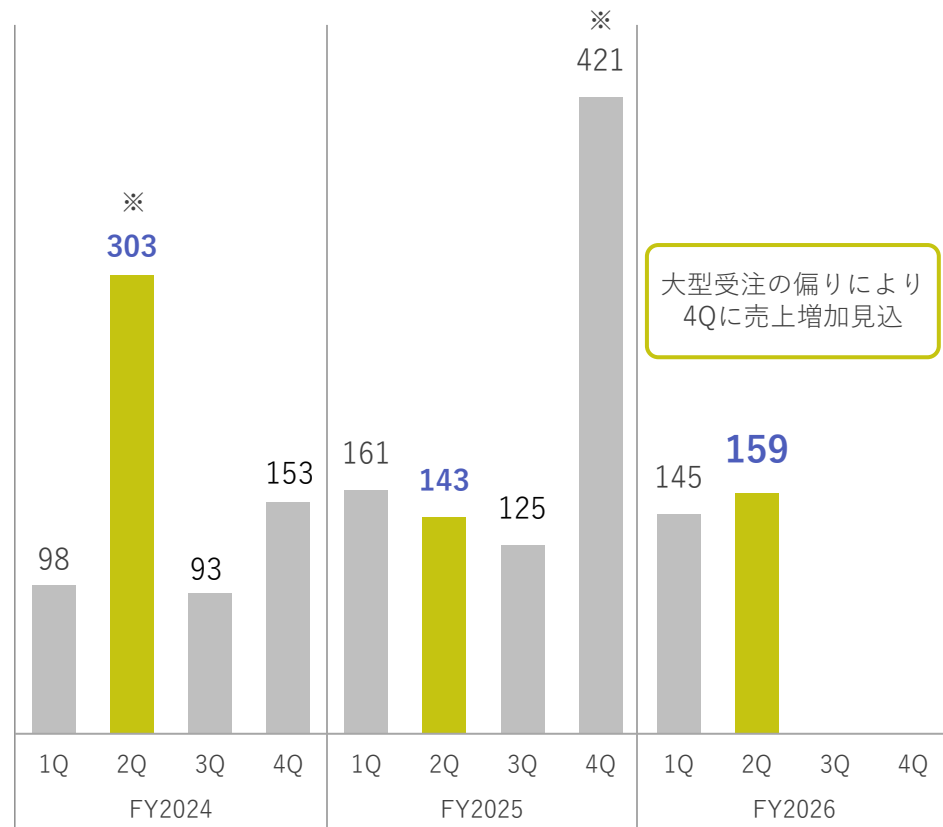
ソリューション別 構成比 (単位：百万円)



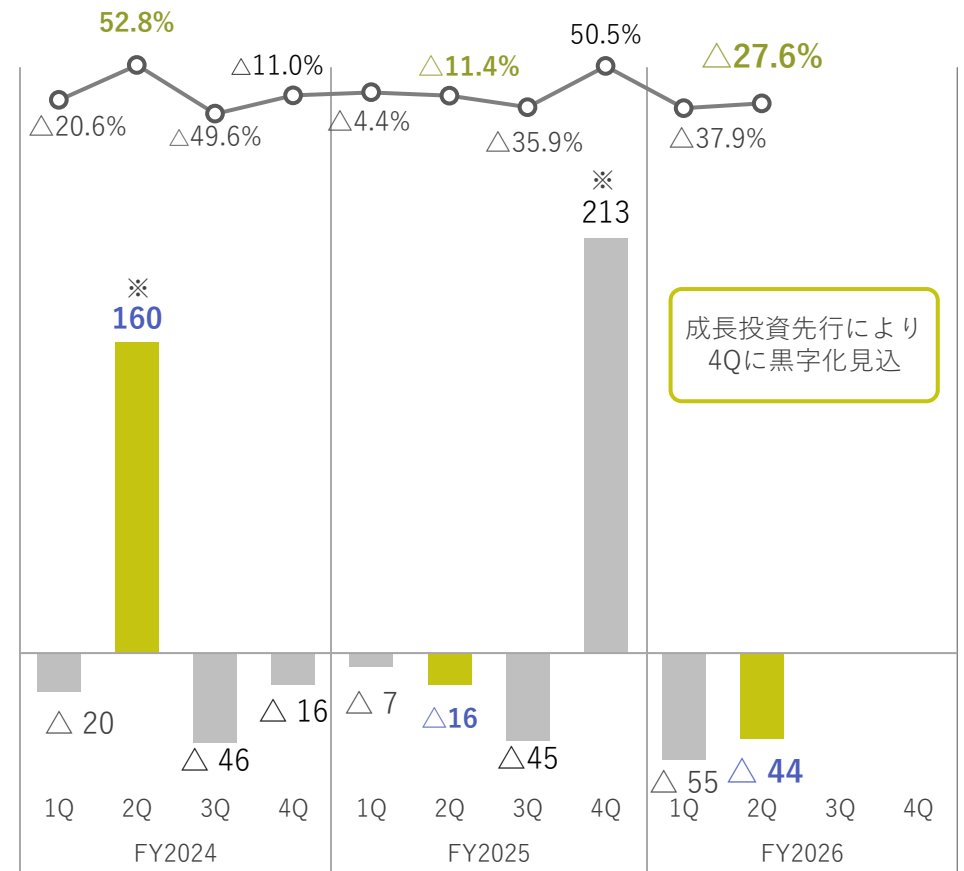
売上高・営業利益 四半期推移

大型商談の予定時期の偏りにより、売上・利益ともに第4Qに増加する見込み。
採用・マーケティングなどの成長投資により、第3Qまでは営業損失が継続する計画。

売上高（単位：百万円）



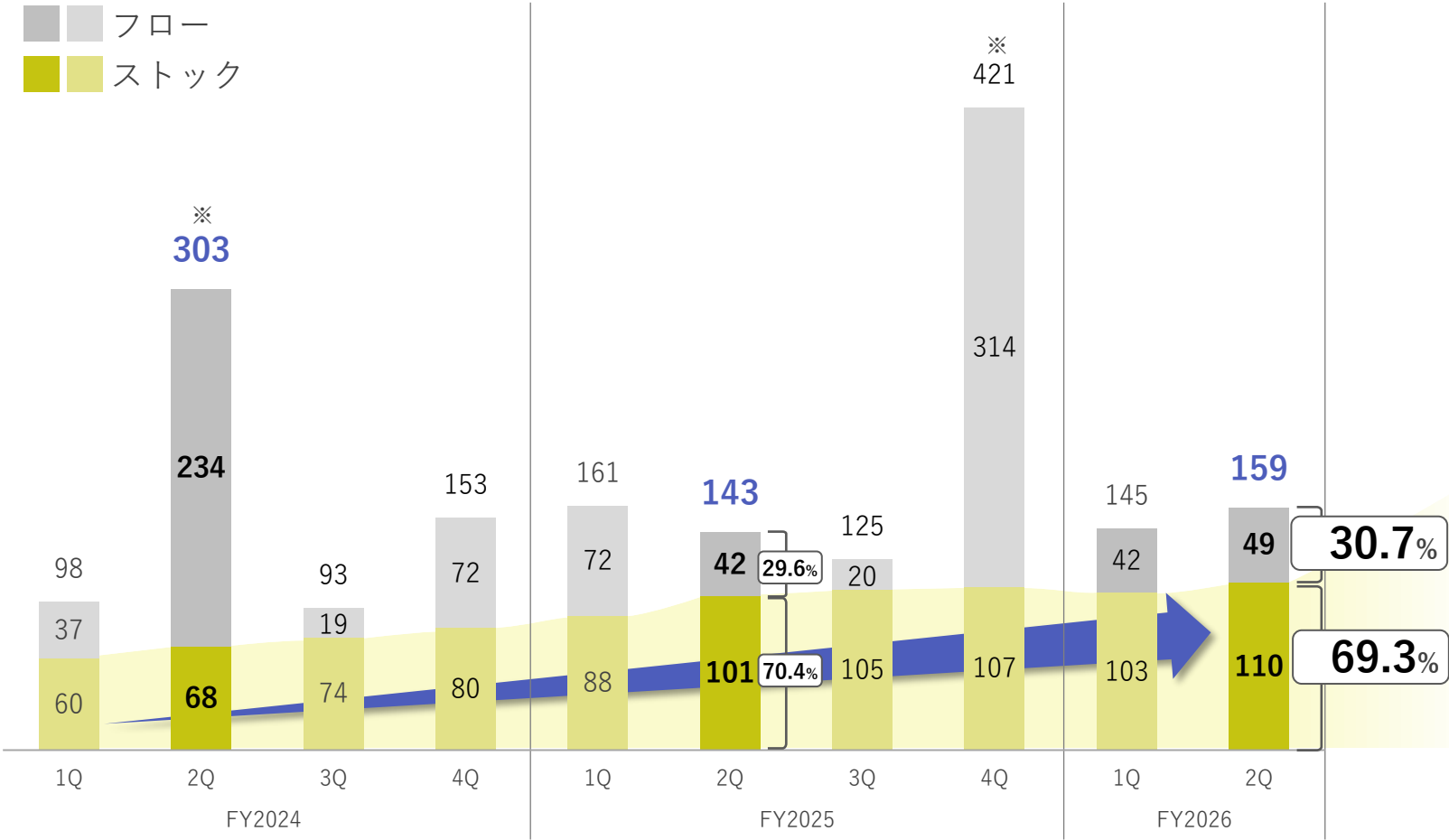
営業利益・営業利益率（単位：百万円）



ストック・フロー 売上高 推移

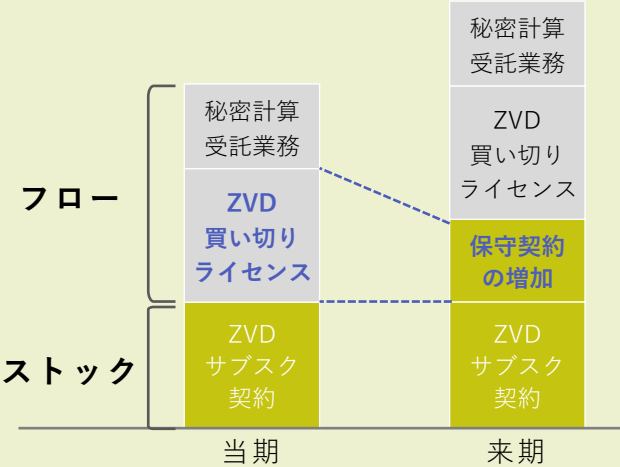
ストック売上比率が約7割を占め、安定的な収益を確保。

(単位：百万円)



収益構造イメージ

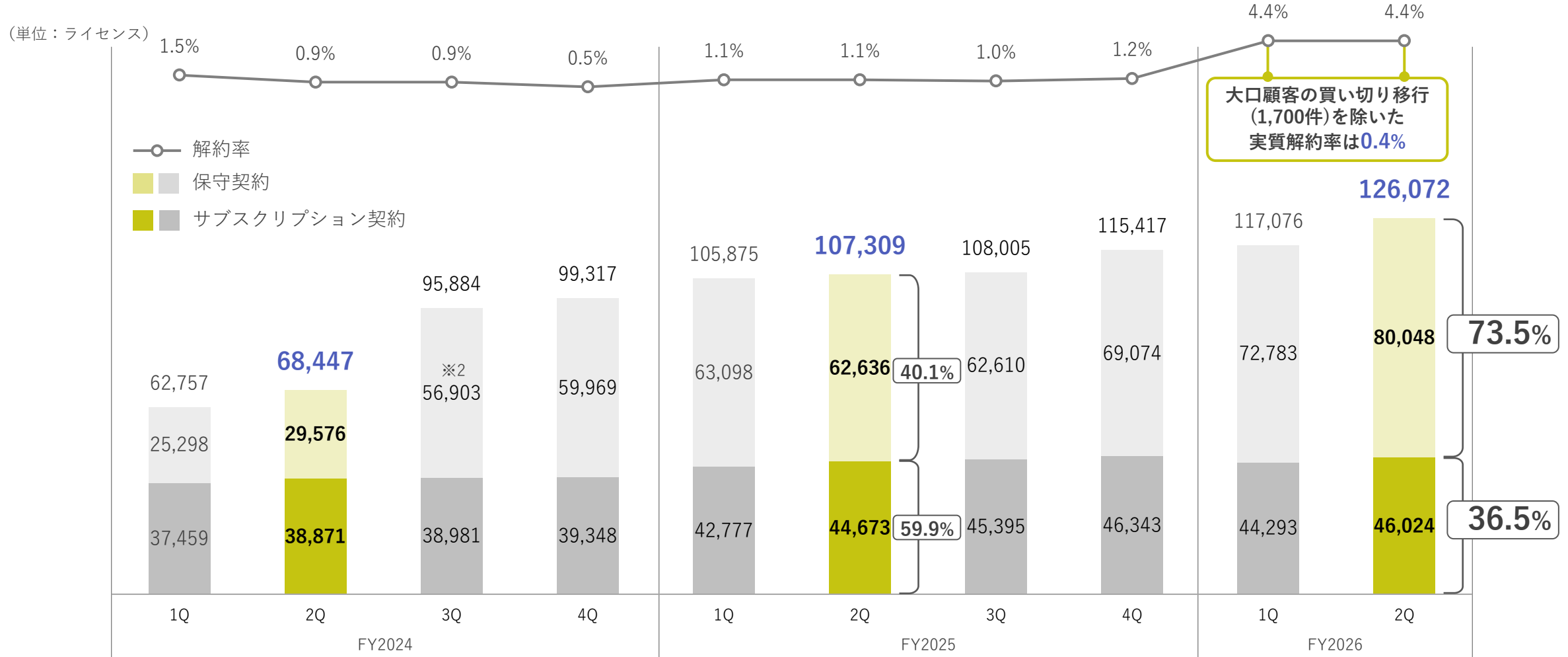
当期のフロー収入のうち、
ZENMU Virtual Drive買い切りライセンス
の収益・売上が
来期のストック収入につながる構造



※：ZENMU Virtual Drive の買い切りライセンスによるフロー売上の一時的な増加

ZENMU Virtual Drive ライセンス数・解約率 推移

ライセンス数は前年同期比で順調に増加。解約率は、大口顧客の契約形態変更により一時的に変動するも、実質解約率は0.4%と低水準を維持。



※1：前年同期末からの1年間におけるZVDサブスク契約の解約ライセンス数 ÷ 前年同期末時点でのZVDサブスク契約のライセンス数

※2：大手損害保険会社への追加導入のため、2024年12月期第3四半期以降に保守契約が増加

AIHOBSの「Digital Trust Grid」にHAIPとの共同開発技術を提供。先進的な医療DX基盤に本格実装。

課題

医療DX市場の拡大に伴うランサムウェア被害の深刻化

- 電子カルテの高度化や政策的な情報共有により医療DX市場が拡大する中、安全なデータ流通基盤の整備が強く求められている。
- 一方、医療機関を狙うランサムウェア被害の深刻化に対し、従来の暗号鍵管理に依存したセキュリティ対策は限界を迎えている。

HAIPと「秘密分散プロキシ」を共同開発
AIHOBSが展開する医療DX基盤「Digital Trust Grid」に採用

医療分野における高度なデータ秘匿と利便性を両立。
秘密分散技術が医療分野の実運用ネットワーク基盤へ
本格実装される重要なマイルストーンに。

公共自治体向けメッシュネットワーク「ナーブネット（NerveNet™）」への秘密分散技術実装に向けた共同開発を開始。

課題

自治体DXの拡大に伴う データ漏えいリスクと 災害時通信の途絶

- ガバメントクラウドやテレワークの普及により扱うデータが増加し、平常時における高度な情報漏えい対策が急務となっている。
- 災害時には通信インフラの断絶や輻輳が発生し、重要データの安定的な共有・活用が困難になる課題がある。



- 国立研究開発法人情報通信研究機（NICT）
- ナシュア・ソリューションズ株式会社
と共同開発を推進

NICTが開発し、ナシュア・ソリューションズに技術移転した災害に強い地域分散
ネットワークの「NerveNet」に秘密分散技術を適用

平常時・災害時を問わず、情報漏えいリスクを抑制しながら、
住民サービスの継続性と信頼性の向上を図る

安全なAI活用を可能にする「秘密分散×RAG（検索拡張生成）ソリューション」を共同開発。
次世代セキュアAI基盤の特許出願も完了。

課題

- ・ 社内業務でRAG（検索拡張生成）の導入が進む一方、従来のシステム構成が抱えるセキュリティリスクがAI活用の障壁となっている。
- ・ サイバー攻撃によるデータ漏洩、暗号鍵の流出に伴う全データ流出、管理者権限の悪用などによる内部不正閲覧のリスクが存在する。



- イージス・アプリケーション株式会社
- 株式会社 Technica AI と共同開発を推進

本技術の優位性

企業・組織の重要な知的財産（ナレッジ）を守りながら
AIを活用する「ナレッジ・セキュリティ」を実現

1 鍵管理からの解放

物理的な分散により、鍵の盗難リスクという従来の暗号化の弱点を克服。

2 耐改ざん性の向上

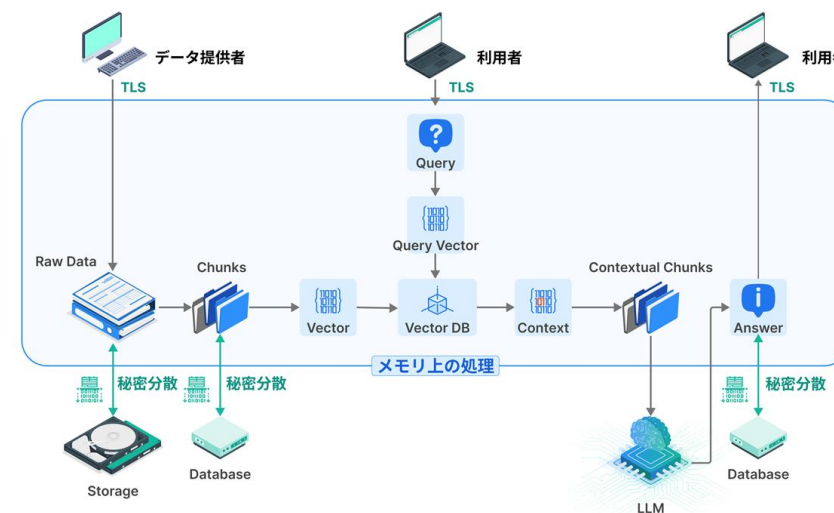
分散されたシェアの一部でも改ざんされるとデータの復元ができなくなるため、データポイズニング攻撃に対しても自己防衛機能を持つ。

3 管理者による閲覧の防止

管理者権限であっても、分散された一部のデータだけでは中身を閲覧できないため、内部不正を防止。

● 秘密分散×RAG 技術の概念図

特許出願中



「ZENMU Virtual Drive Enterprise Edition (ZEE)」のデジタルワーク環境を支えるエンドポイントセキュリティ市場への販売拡大に向け、3社で業務提携し、顧客紹介契約を締結。

3社で業務提携

**ZENMU
TECH**

PC からの情報漏洩リスクを根本から排除するエンドポイント向けセキュリティソリューション「ZEE」を展開

Mint Wave

株式会社ミントウェーブ

ZEE の販売代理店であり、これまで多くの企業の IT インフラ改革を支援

顧客紹介

**TMI
PRIVACY
AND
SECURITY**

TMI プライバシー &
セキュリティコンサルティング
株式会社

高度な法的知見と、データ活用・サイバーセキュリティ分野の最新のテクノロジーを融合し、データ活用とセキュリティの多様なニーズに応えるサービスを提供

TMIP&Sの顧客

「ZEE」の販売と
導入支援

エンドポイントセキュリティ市場において、
法令対応と実効性の双方を満たす情報漏洩対策の実現へ

EBISION 2026※にて「Industry Pioneer Award」を受賞



Industry Pioneer Awardとは

Eビジネス情報システムの分野において、産業界における革新的な取り組みを開始し、実装・実用化に成功した個人またはチームを表彰する賞。

受賞対象には、実践的な成功、測定可能なインパクト、業界標準または実務慣行の発展に対する重要な貢献が求められる。

受賞理由

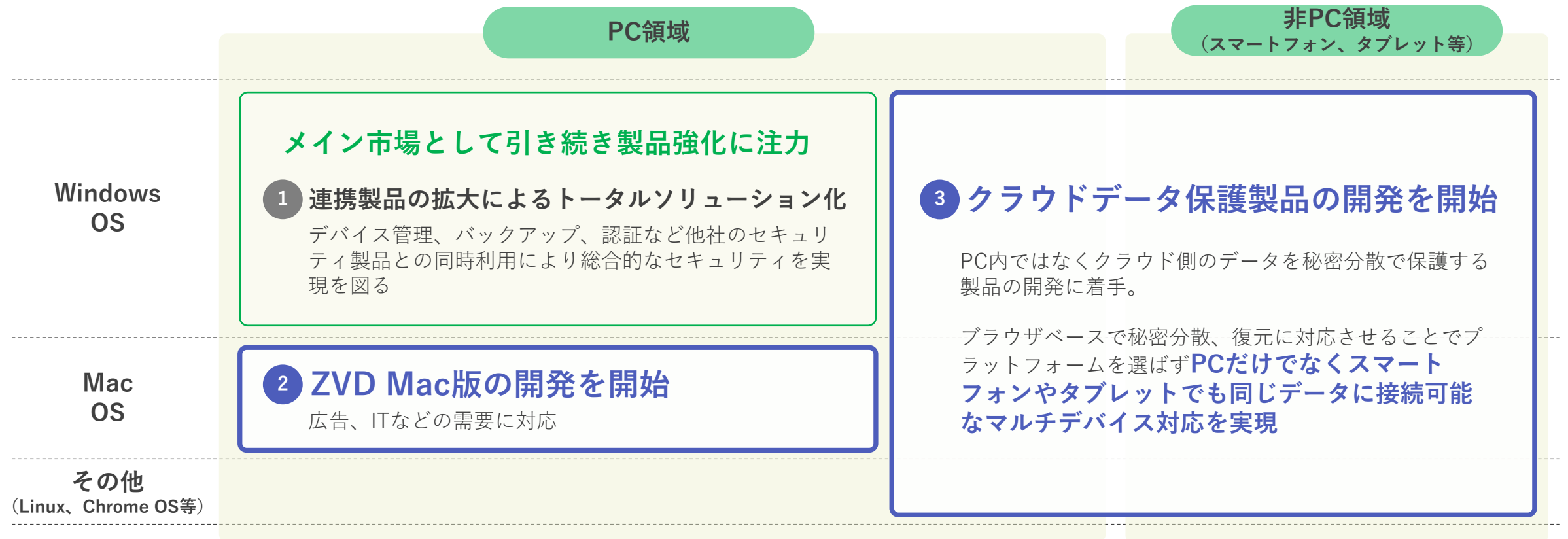
当社が取り組んできた秘密分散技術「XCTRT / ZENMU-AONT」の研究成果と、その技術を実社会のデータ保護ソリューションへ展開してきた実績が評価された。

協業・提携によるPC向けトータルソリューション化

他社のセキュリティ製品との同時利用や共同販売によるタッチポイント創出、総合的なセキュリティ実現を図る

マルチOS、マルチデバイス/クラウド対応

現行のWindows PC向けだけでなく macOS や PC 以外のスマートフォン・タブレットなどデバイスの種類を選ばず利用可能なサービスの開発を検討

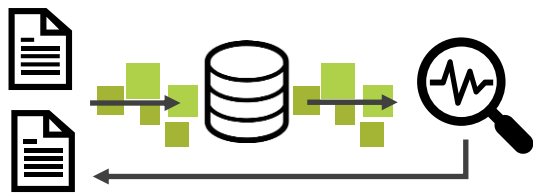


秘密計算ビジネスのプライバシー保護技術領域に関する取り組み

プライバシー保護技術領域（PETs）における研究開発体制の強化を目的として
統計数理研究所 村上隆夫准教授を当初顧問に招聘。

データを秘匿したまま分析を可能とする秘密計算技術への期待が高まる一方、**分析結果そのものから元データに関する情報が推測されるリスクへの対応、いわゆる「アウトプットプライバシー」**が一つの重要な論点となっており、秘密分散技術、秘密計算技術をベースとしたPETs領域における競争優位性のさらなる向上を図るため、村上氏を顧問として招聘

データを秘匿化して分析



分析結果から元データに関する
情報が推測されるリスク

プライバシー保護技術を
強化することで、
競争優位性を向上

村上 隆夫 准教授

（統計数理研究所 学際統計数理研究系）

差分プライバシー、データ匿名化、プライバシー保護データ分析などの研究分野における国内有数の研究者であり、理論研究から社会実装まで幅広い実績を保有



村上 顧問からのコメント

差分プライバシーを中心とした出力プライバシーの研究をしており、データ解析結果から元データが漏えいするリスクの解析や、データ解析精度とプライバシーを両立する技術開発などに取り組んでおります。PETs の社会実装にも興味を持っており、私の専門知識がZenmuTechのPETs領域の競争力強化に繋がると考え、この度、顧問をお引き受けいたしました。私の専門知識と研究経験を活かして、出力プライバシーに関する学術的・技術的支援を幅広く行っていきたいと考えております。特に、秘密計算と出力プライバシーは補完的な関係にあり、両者を合わせることで安心・安全なデータ利活用が推進できるものと考えております。

秘匿性を担保したデータ連携・分析により、組織を超えたデータ活用を実現し、新しい価値を共創する。

ミッション

秘匿性を担保したデータ連携・分析



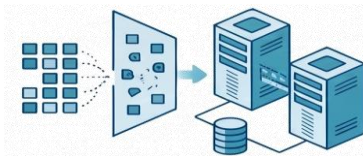
組織を超えたデータ活用



新しい価値を
共創

スコープ

秘密分散技術を用いた
データの保持・伝送



データを秘密分散（無意味化）
して安全な保持ならびに
伝送を実現

秘密計算技術を用いた
データの分析・活用



データを暗号化したまま分析し、
データの機密性と
流動性の両立を実現

データの保護・出力



高機能暗号と組み合わせることで
入力から出力まで一貫した
保護を実現し、
情報漏洩リスクを低減

MPCによる秘密計算技術を基軸としつつ、ミッションを実現するために必要な

高機能暗号の採用

関連技術の採用・連携

にも、積極的に取り組んでいく

取り組み

アクセスコントロール強化
によるさらなる安全性向上

BigObject社との協業、
他の高機能暗号（準同型暗号）
や連合学習等の検討

当該研究における第一人者である
統数研村上隆夫氏の顧問招聘

秘密計算データベースからスタートしたQueryAhead®、今期はクラウドベースのプラットフォーム化を実現し、より多くのお客様に「データはもっと自由になれる」世界を体験していただく。

クラウドベースの プラットフォーム化

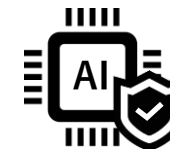
PaaS (QueryAhead Hub)
を通じて受託・フロー型から
クラウドの継続課金モデルへ転換



**ARR積み上げ型の
成長基盤を確立**

2026年12月期 4Q

機密データを秘匿したまま
AI学習・推論・分析を加速
AI/ML x PETsの実現へ



AI-Ready

2027年12月期

ネイティブコード化

により秘密計算の基本処理を
従来比**100倍以上に高速化**



2026年12月期 2Q

専門知識不要で
秘密計算技術を利用できる
**秘密計算データベース
のローンチ**



～2026年12月期1Q

データがもっと自由になれる世界へ

Gov（国）プロジェクト関連の受託案件（フロー収益）中心の売上からPaaS化。
「収益・市場・導入」のボトルネックを解消し、継続的な成長基盤を構築する。

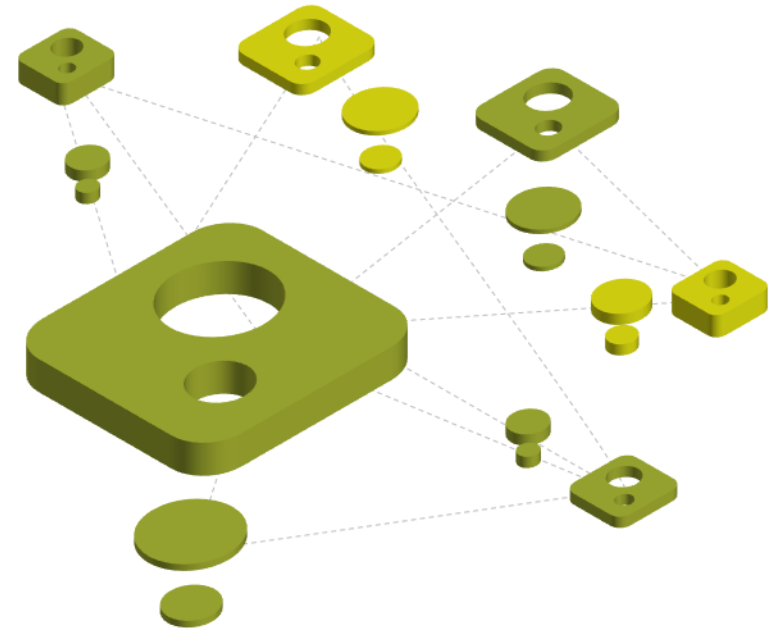
PaaS化

	現状の課題		期待される効果
収益構造 	売上の8割強がGov(国)プロジェクト等の労働集約型ビジネス。エンジニアリソースが開発に拘束される「売り切り型（フロー）」であり、収益の予測と積み上げが困難。	➡	✓ 汎用ソリューションとしてのサブスクリプション（継続課金）モデルへ移行し、安定的かつ継続的な成長基盤を構築（ARR積み上げ）。
市場の拡大余地 	オンプレミス志向のままでは導入先が金融・医療などの「超規制業界」に限定されやすい。クラウドが主流（71%）である世界の秘密計算市場の成長セグメントを取り込めていない。	➡	✓ データウェアハウスとの連携を容易にし可用性を向上させることで、世界市場のボリュームゾーンへ適合。
導入のハードル 	専用環境構築やデータ移動が必要であり、リードタイムが長期化。顧客が手軽に試せない。	➡	✓ 無料トライアル→ 小規模PoC→ 本番採用のPLG（Product-Led Growth）ファネルを確立し、顧客獲得効率を向上。

マテリアルズ・インフォマティクス（AIや機械学習、ビッグデータを活用して新材料探索を高速化・効率化するデータ駆動型の研究手法）を中心に複数のPoCが進行中

プロジェクト	概要	企画/準備	実証	契約	プリサービス	リリース予定
民間プロジェクト(MI)	マテリアルズ・インフォマティクス分野における先進的なデータ利活用					2026
民間プロジェクト(金融)	金融機関向けのプライバシーデータ利活用					2028
台湾BigObject	BigObjectの知見、ネットワークをもとに製造、金融、ヘルスケア領域でのデータ基盤構築をはかる					2026～2027
Gov（国）プロジェクト	量子コンピュータ、インフラ領域におけるプライバシーデータ利活用	内閣府が主導する戦略的イノベーション創造プログラムの他、複数のプロジェクトに参画しており、プロジェクトにおける成果や提言を通じて、我が国のデータセキュリティ戦略の推進と、信頼性のある自由なデータ流通に貢献してまいります。				

2. 2026年12月期 業績予想



2026年12月期 業績予想

上期未達も通期計画は維持

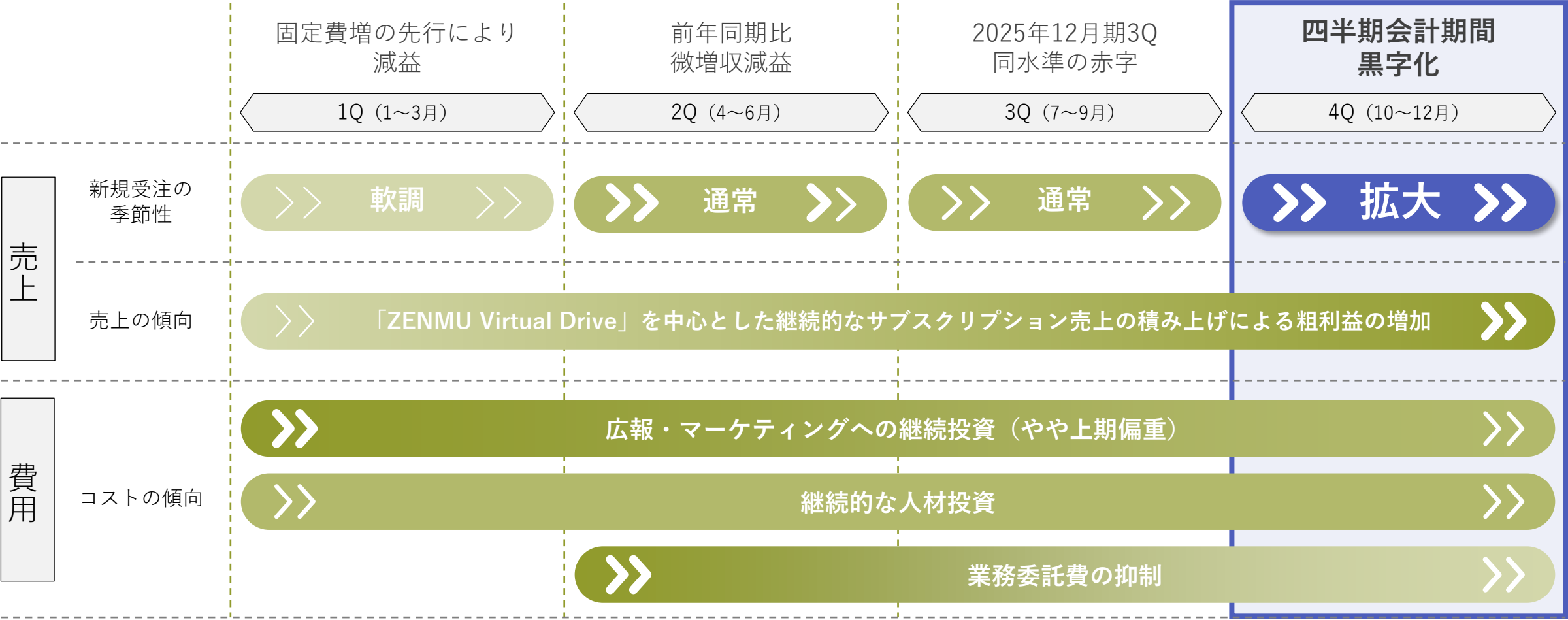
売上・利益ともに計画は下期偏重。ZENMU Virtual Driveの安定的な成長に加え、秘密分散・秘密計算ソリューションの認知拡大およびパートナーシップの拡大を目論み、売上・利益ともに成長を見込む。

	2025年12月期実績	2026年12月期		前期比増減率
		2Q着地	通期予想	
(単位：百万円)				
売上高	851	305	1,080	+26.8%
営業利益	143	△99	161	+12.1%
営業利益率	16.9%	-	14.9%	-
経常利益	160	△79	180	+12.1%
経常利益率	18.9%	-	16.7%	-
当期純利益	155	60	302	+93.7%
当期純利益率	18.3%	-	28.0%	-

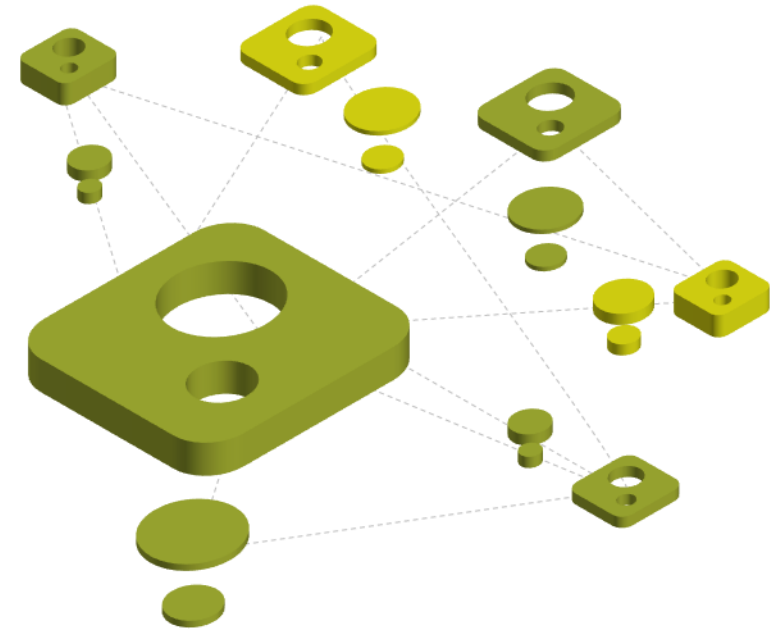
2026年12月期 業績予想

2026年12月期の四半期業績計画は大型商談の予定時期の偏りにより3Q会計期間まで赤字見込み

- ・ 採用、マーケティングなど成長投資による費用先行から、3Q会計期間までは赤字が継続
- ・ 4Q会計期間は費用負担を上回る売上増加により、通期で黒字化の見込み

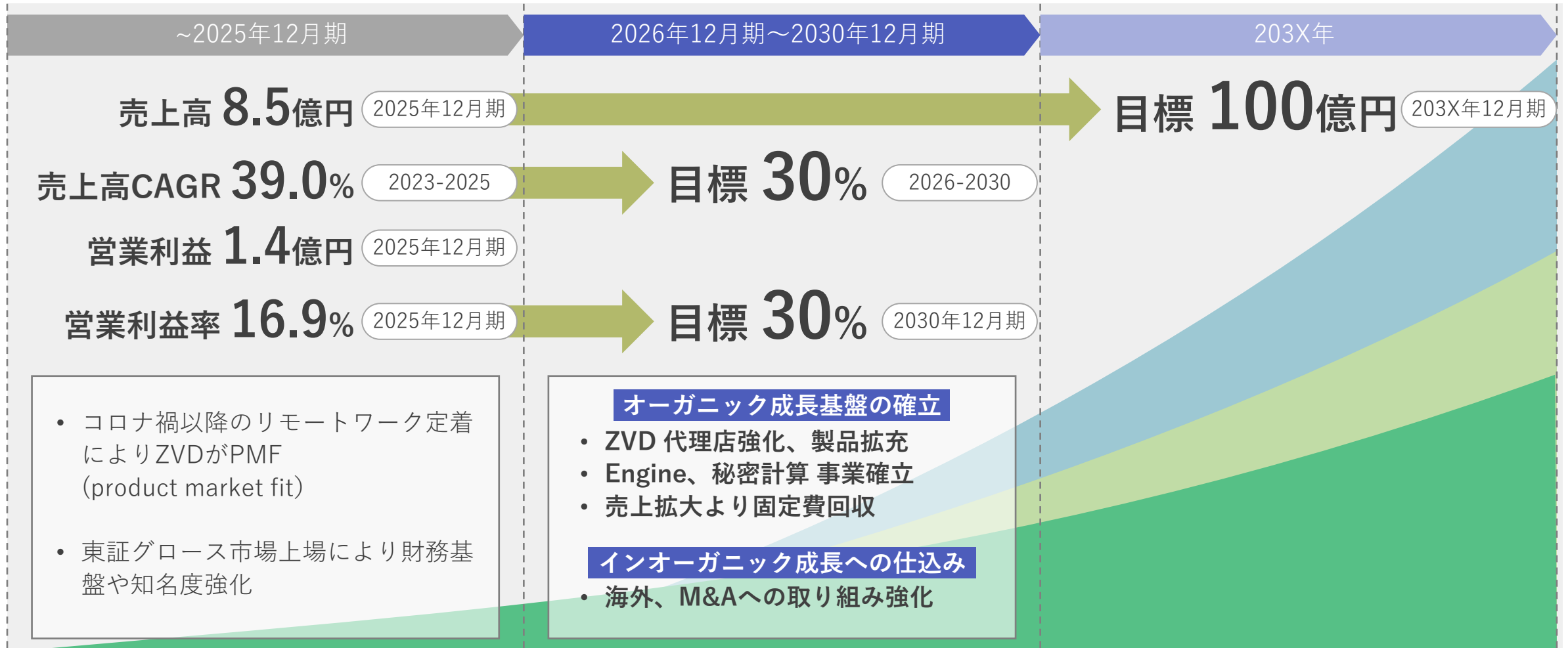


3. 成長戦略



中期成長目標 “triple 30 Plan” 2030年12月期 売上年平均成長率30% × 営業利益率30%2030年12月期までの中期目標 売上高CAGR（年平均成長率）30% × 営業利益率 30%

オーガニック成長を加速させるとともに、インオーガニック成長への施策に取り組み、
長期目標では売上高100億円企業を目指す。



短期的にはZENMU Virtual Driveによる収益基盤を形成、中長期的には、ZENMU Engine、秘密計算によるサービス充実化を図り、事業領域の拡大と持続的成長を目指す

		戦略	主な施策
短期	情報漏洩対策ソリューション ZENMU Virtual Drive	VDI共存戦略により商談機会創出 大企業のPC買替、システム見直しによりZVDシェア拡大	✓ 大企業中心にアプローチ ✓ 自社直販とSlerなど販売代理店網を拡大し販売力を強化 ✓ カスタマーサクセス活動によるリテンションとアップセル
	秘密分散ソリューション ZENMU Engine	アライアンス戦略強化により事業を拡大 OEMプロダクト群の形成	✓ 既存アライアンスにおいて、ドローンや車載データ、監視カメラ、AIなどの成長分野においてZENMU Engineの活用を進める ✓ アライアンスパートナー数の拡大 ✓ 秘密分散技術の特性を活用したOEMプロダクト群の形成
	秘密計算ソリューション QueryAhead®	AI、機械学習の加速とともに事業を拡大 海外事業展開	✓ 産総研との共同研究による認知度向上への取り組み ✓ 第三者によるQueryAheadの安全性証明を検討 ✓ QueryAhead® のPaaSソリューション転換によるPLG ✓ 秘密計算適用領域へのアプローチ

販売代理店の拡充：代理店のポジショニングにあわせた販売シナリオ

800万人以上の国内VDIユーザーに対し現時点での
ZENMU Virtual Driveのユーザー数は約1%と獲得余地は大きい

国内の全ホワイトカラー
2,700万人^{※1}

国内VDIユーザー数
802万人^{※2}

ZENMU Virtual Drive
ユーザー数
11万人^{※3}

対 VDI市場戦略（置き換え、共存戦略）

置き換え

引き続きPCライフサイクル管理を強みとするSierとの連携を強化。
コスト、利便性などVDIとの比較優位性を訴求

共存

新たにVDI、DaaSの販売実績の大きいSierとの連携を開拓。
VDIのメリットはそのままに併用による付加価値を提案

対 非VDI市場戦略

中小向け、士業事務所向け提案

中小企業向け、会計事務所特化など、特色をもった中堅Sier、
販売会社を軸にコストや導入のしやすさを訴求

※1：労働力調査（令和5年総務省）の基づく全就労者数と国勢調査（令和2年）に基づくホワイトカラー比率から推計。

※2：VDIユーザー数:2024年実績値 2025年6月IDC市場予測資料

※3：2025年12月現在、買い切りライセンスによる保守契約を含む

VDIおよびDaaSとの併用を前提とした廉価版「ZLE」と
大企業のBCP需要に応える「ディザスタリカバリオプション」を新たにリリース

課題

VDIの利用方式として従来の主流であるハードディスク(HDD)を内蔵しないシンクライアント端末での利用から、通常のPCで利用するケースが増加傾向。ユーザーがローカルにデータを保存できるため利便性は高い一方で、PCの紛失・盗難時の情報漏洩リスクが懸念。

2025年2月から新製品「ZENMU Virtual Drive Limited Edition」を月額500円で提供開始
VDI及びDaaS利用中のユーザー向けVDI利用と併用を前提とした新たな提案

ZENMU Virtual Drive Limited Edition (ZLE)

- ✓ VDI・DaaSの利用環境で、Windows PCのローカルに保管したデータを保護
- ✓ VDI・DaaSとの併用に必要な機能に絞り込み、安価で提供

PCの更新タイミングに限られない導入機会を創出

課題

自然災害の発生やAWS東京リージョンへの依存によるシステム停止リスクの高まり、企業の事業継続計画への対応強化の要求を背景に、高可用性と冗長性を備えたIT環境の重要性が高まっている。

「ZENMU Virtual Drive ディザスタリカバリ オプション」は、大規模災害時にお客様の接続先を大阪リージョンに振り向け、継続的な利用を可能に



マルチリージョン

金融系など大企業からの需要に対応、有償OPとしてアップセル

協業・提携によるPC向けトータルソリューション化

他社のセキュリティ製品との同時利用や共同販売によるタッチポイント創出、総合的なセキュリティ実現を図る

マルチOS、マルチデバイス/クラウド対応

現行のWindows PC向けだけでなく macOS や PC 以外のスマートフォン・タブレットなどデバイスの種類を選ばず利用可能なサービスの開発を検討

PC領域

非PC領域 (スマートフォン、タブレット等)

Windows
OS

メイン市場として引き続き製品強化に注力

- 1 連携製品の拡大によるトータルソリューション化
デバイス管理、バックアップ、認証など他社のセキュリティ製品との同時利用により総合的なセキュリティを実現を図る

Mac
OS

- 2 ZVD Mac版の開発を開始
広告、ITなどの需要に対応

その他
(Linux、Chrome OS等)

3 クラウドデータ保護製品の開発を開始

PC内ではなくクラウド側のデータを秘密分散で保護する製品の開発に着手。

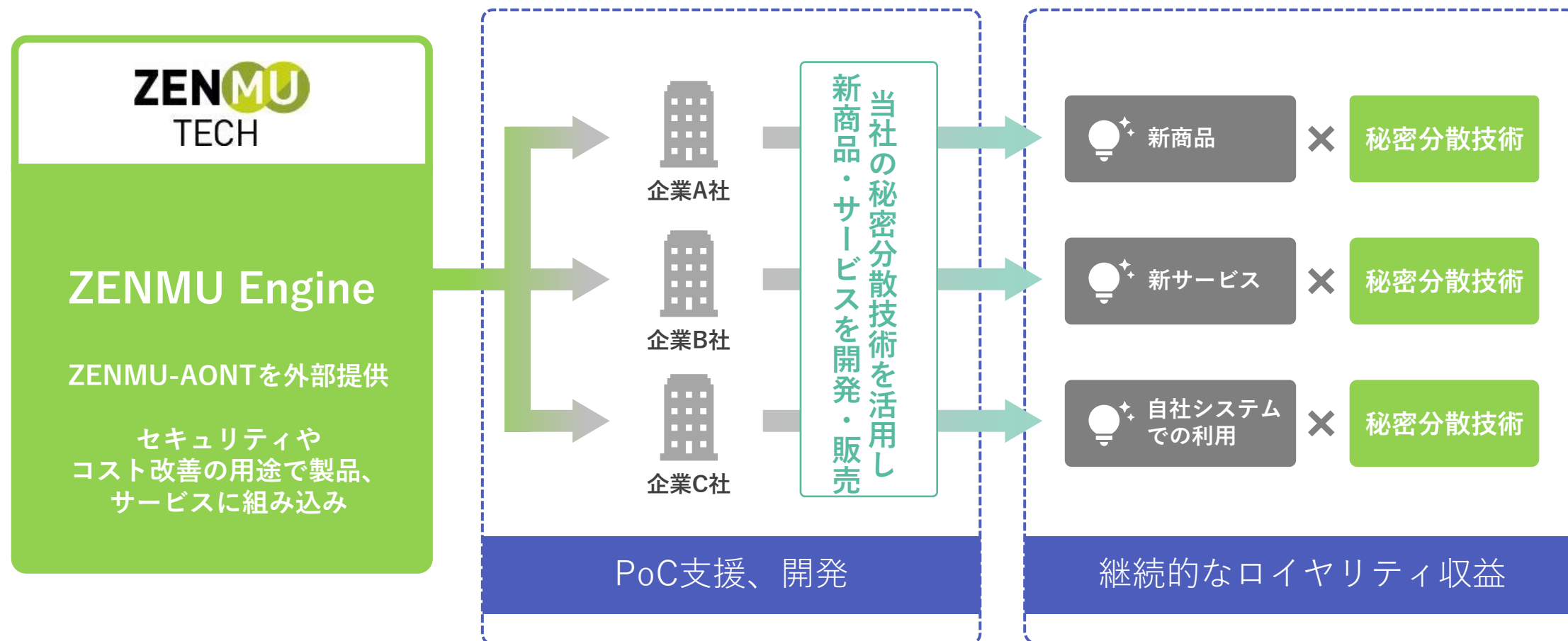
ブラウザベースで秘密分散、復元に対応させることでプラットフォームを選ばず**PCだけでなくスマートフォンやタブレットでも同じデータに接続可能なマルチデバイス対応を実現**

アライアンス戦略強化により事業を拡大

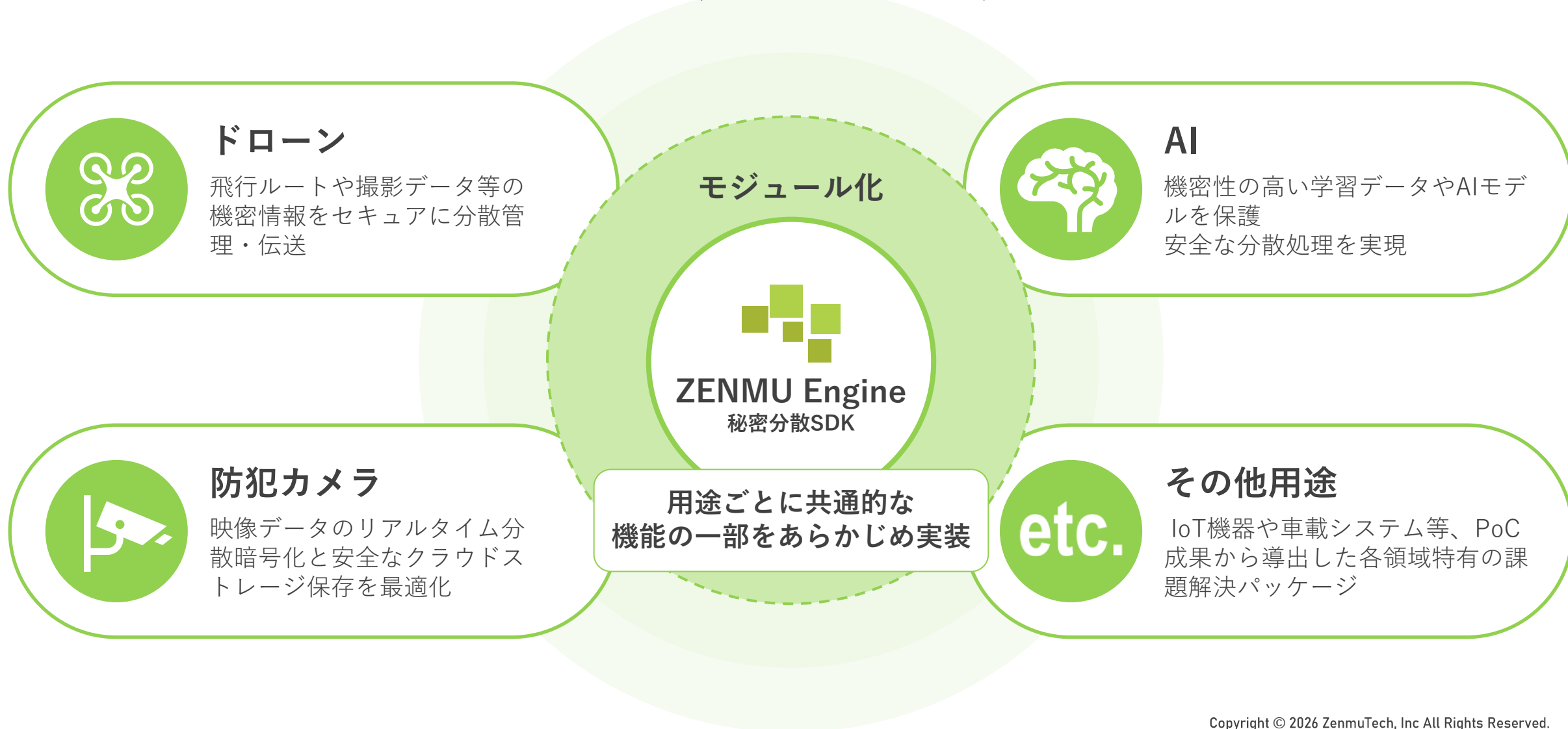
ZENMU Engine

ZENMU
TECH

企画/提案→検証→開発→販売というパイプラインの拡大、スピードアップのため採用や専任化により体制を強化



Engineの単体提供に加えて、これまでのPoCから抽出した各領域の課題、用途に応じた共通的な機能の一部を加えたモジュール化を行うことでお客様側での製品開発期間の短縮、コストの大幅削減を実現



プロジェクトの性質上、非公開の案件も相当数が進捗しており、
イノベーション創出への萌芽が着実に現れ始めている

プロジェクト	概要	企画/準備	実証	契約	プリサービス	リリース予定
セキュリティソリューション開発	文教、自治体向けソリューションのセキュリティ強化					2026 RevoWorks ZENMU-Storage
ファイル転送ソリューション開発	複数のパートナーとデータ転送や共有サービスのセキュリティ強化					2026
ドローンプロジェクト	データ転送、保管に関するセキュリティ強化					2028
AIプロジェクト	AIで利用するデータについてセキュリティと利便性を両立					2026～2027
医療系プロジェクト	医療分野のDXに対して安価なセキュリティ基盤の提供					

プライバシー保護技術領域※における研究開発体制の強化を目的として
統計数理研究所 村上隆夫准教授を当初顧問に招聘。

データを秘匿したまま分析を可能とする秘密計算技術への期待が高まる一方、**分析結果そのものから元データに関する情報が推測されるリスクへの対応、いわゆる「アウトプットプライバシー」**が一つの重要な論点となっており、秘密分散技術、秘密計算技術をベースとしたPETs領域における競争優位性のさらなる向上を図るため、村上氏を顧問として招聘

データを秘匿化して分析



分析結果から元データに関する
情報が推測されるリスク

プライバシー保護技術を
強化することで、
競争優位性を向上

村上 隆夫 准教授

(統計数理研究所 学際統計数理研究系)

差分プライバシー、データ匿名化、プライバシー保護データ分析などの研究分野における国内有数の研究者であり、理論研究から社会実装まで幅広い実績を保有



村上 顧問からのコメント

差分プライバシーを中心とした出力プライバシーの研究をしており、データ解析結果から元データが漏えいするリスクの解析や、データ解析精度とプライバシーを両立する技術開発などに取り組んでおります。PETsの社会実装にも興味を持っており、私の専門知識がZenmuTechのPETs領域の競争力強化に繋がると考え、この度、顧問をお引き受けいたしました。私の専門知識と研究経験を活かして、出力プライバシーに関する学術的・技術的支援を幅広く行っていきたいと考えております。特に、秘密計算と出力プライバシーは補完的な関係にあり、両者を合わせることで安心・安全なデータ利活用が推進できるものと考えております。

秘匿性を担保したデータ連携・分析により、組織を超えたデータ活用を実現し、新しい価値を共創する。

ミッション

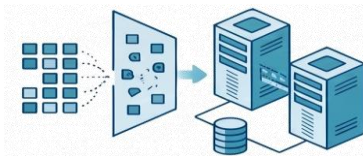
秘匿性を担保したデータ連携・分析



組織を超えたデータ活用

新しい価値を
共創

スコープ

秘密分散技術を用いた
データの保持・伝送データを秘密分散（無意味化）
して安全な保持ならびに
伝送を実現秘密計算技術を用いた
データの分析・活用データを暗号化したまま分析し、
データの機密性と
流動性の両立を実現

データの保護・出力

高機能暗号と組み合わせることで
入力から出力まで一貫した
保護を実現し、
情報漏洩リスクを低減

MPCによる秘密計算技術を基軸としつつ、ミッションを実現するために必要な

高機能暗号の採用

関連技術の採用・連携

にも、積極的に取り組んでいく

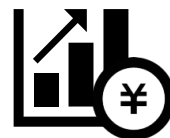
取り組み

アクセスコントロール強化
によるさらなる安全性向上BigObject社との協業、
他の高機能暗号（準同型暗号）
や連合学習等の検討当該研究における第一人者である
統数研村上隆夫氏の顧問招聘

秘密計算データベースからスタートしたQueryAhead®、今期はクラウドベースのプラットフォーム化を実現し、より多くのお客様に「データはもっと自由になれる」世界を体験していただく。

クラウドベースの プラットフォーム化

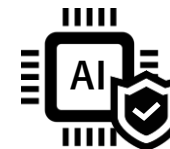
PaaS (QueryAhead Hub)
を通じて受託・フロー型から
クラウドの継続課金モデルへ転換



**ARR積み上げ型の
成長基盤を確立**

2026年12月期 4Q

機密データを秘匿したまま
AI学習・推論・分析を加速
AI/ML x PETsの実現へ



AI-Ready

2027年12月期

ネイティブコード化

により秘密計算の基本処理を
従来比**100倍以上に高速化**



2026年12月期 2Q

専門知識不要で
秘密計算技術を利用できる
**秘密計算データベース
のローンチ**



～2026年12月期1Q

データがもっと自由になれる世界へ

Gov（国）プロジェクト関連の受託案件（フロー収益）中心の売上からPaaS化。
「収益・市場・導入」のボトルネックを解消し、継続的な成長基盤を構築する。

PaaS化

	現状の課題		期待される効果
収益構造 	売上の8割強がGov(国)プロジェクト等の労働集約型ビジネス。エンジニアリソースが開発に拘束される「売り切り型（フロー）」であり、収益の予測と積み上げが困難。	➡	✓ 汎用ソリューションとしてのサブスクリプション（継続課金）モデルへ移行し、安定的かつ継続的な成長基盤を構築（ARR積み上げ）。
市場の拡大余地 	オンプレミス志向のままでは導入先が金融・医療などの「超規制業界」に限定されやすい。クラウドが主流（71%）である世界の秘密計算市場の成長セグメントを取り込めていない。	➡	✓ データウェアハウスとの連携を容易にし可用性を向上させることで、世界市場のボリュームゾーンへ適合。
導入のハードル 	専用環境構築やデータ移動が必要であり、リードタイムが長期化。顧客が手軽に試せない。	➡	✓ 無料トライアル→ 小規模PoC→ 本番採用のPLG（Product-Led Growth）ファネルを確立し、顧客獲得効率を向上。

情報セキュリティ市場は海外のシェアが大きいため、今後は米国等への海外展開も見据え、事業化へ向けて積極的な投資を行う予定。各地域において市場調査段階、展示会の出展やパートナー開拓を実行中。

欧州(EU)

- ✓ GDPRによる個人情報に関する厳しい保護規制
→ 制約下での利用について秘密計算に商機
- ✓ 今後の市場調査を検討

北米(USA)

- ✓ 2022年から展示会出展など
市場調査、パートナー開拓を推進

APAC

- ✓ DXが進みAPACのHQが集中する
シンガポールへの進出を検討
- ✓ 台湾では電子企業等向けに
Engine紹介のため展示会出展も検討

※ CONFIDENTIAL COMPUTING CONSORTIUM 「Common Terminology for Confidential Computing」

世界市場規模

2024年

160-180億ドル

2026年(推定)

520-540億ドル

当社が採用する
「Multi-party computing」領域の市場規模



Privacy and security



Blockchain



Multi-Party computing

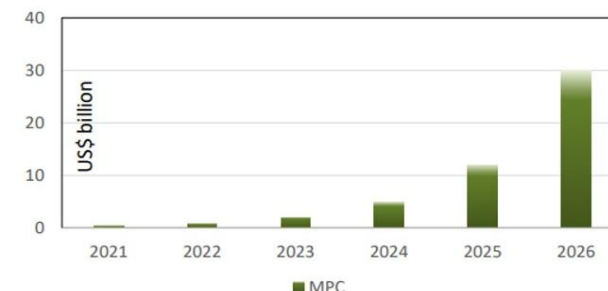


IoT and edge



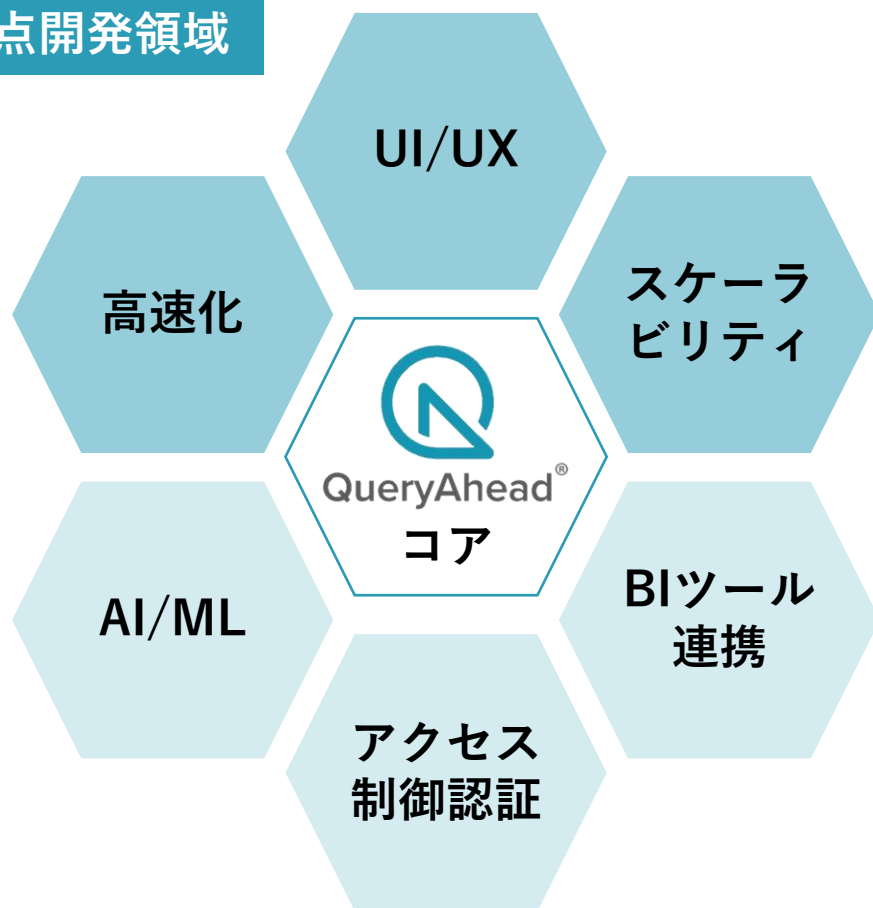
Personal computing devices

Multi-party computing



機能強化とビジネス開拓に並行で取り組む。リピート案件を中心とした受託収益を確保しながら
商用サービス化に向けてアライアンスを開拓

重点開発領域



Development

回帰や次元圧縮といった人工知能や機械学習を用いたプライバシーデータの活用需要が高いため、これらに対応するモジュール開発をさらに充実させるとともに、ビッグデータの高速な秘密計算処理を実現するシステムリファインメントをプライオリティとする



Collaboration

安全性の担保、最先端技術の導入と普及、世界トップレベルの学会への発信といったあらゆるフェーズにおいて産総研との協業をさらに深化させ、グローバルで価値創出が可能なソリューションを開発していく



Business

豊富な国プロ参画の経験・知見をベースに国家安全保障におけるデータセキュリティ戦略に貢献していくとともに、市場における着実な社会実装、価値創出をさらに具現化し、官民共創のロールモデル確立を追求していく

リアルタイム・ビッグデータ解析プラットフォームを提供する台湾のBigObjectと、機密データを安全に活用しながら高性能なデータ分析を可能にするプラットフォームの実現に向けた戦略的協業に関するMOUを締結

本協業の背景

台湾のデータ活用政策におけるデータ駆動型社会とAI推進の加速

デジタル発展部（moda）の主導によるオープンデータ政策や「台湾AI行動計画」のもと、医療やスマートシティ分野でのデータ利活用が強力に推進中。

データの積極活用と強力なプライバシー保護の両立が国家的な急務となっており、本協業の技術が強く求められている。

BigObject Inc.

独自のインメモリ技術を活用した超高速なビッグデータ分析やエッジコンピューティング領域に強みを持つテクノロジー企業。スマートマニュファクチャリングや金融分野で豊富な実績を持ち、本提携を通じて高度なセキュリティ領域へ事業を拡大。



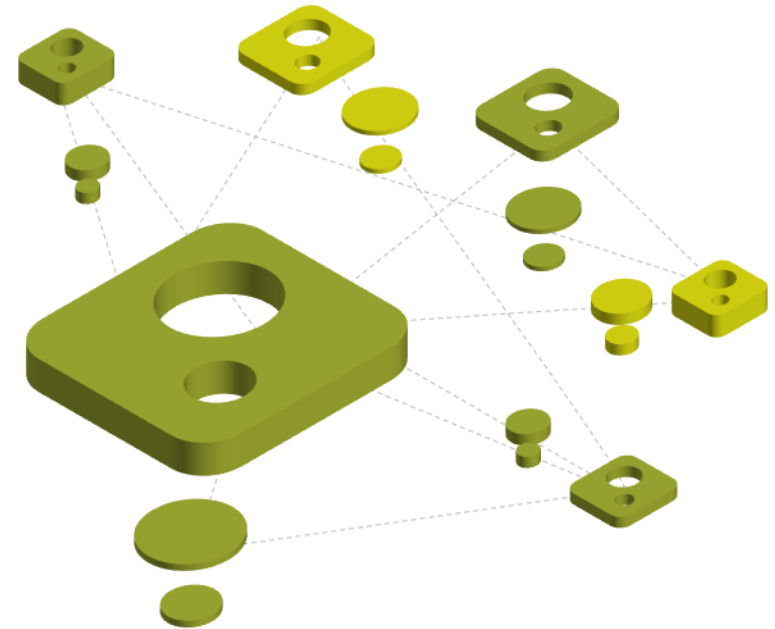
**プライバシーを保護した形で機密データを活用できる
新しいデータ活用基盤の確立を目指す**

マテリアルズ・インフォマティクス（AIや機械学習、ビッグデータを活用して新材料探索を高速化・効率化するデータ駆動型の研究手法）を中心に複数のPoCが進行中

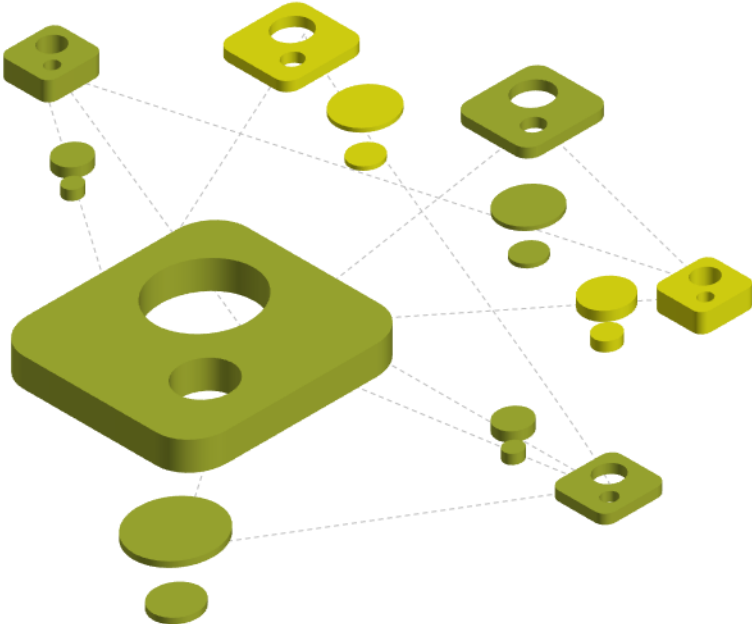
プロジェクト	概要	企画/準備	実証	契約	プリサービス	リリース予定
民間プロジェクト(MI)	マテリアルズ・インフォマティクス分野における先進的なデータ利活用					2026
民間プロジェクト(金融)	金融機関向けのプライバシーデータ利活用					2028
台湾BigObject	BigObjectの知見、ネットワークをもとに製造、金融、ヘルスケア領域でのデータ基盤構築をはかる					2026～2027
Gov（国）プロジェクト	量子コンピュータ、インフラ領域におけるプライバシーデータ利活用	内閣府が主導する戦略的イノベーション創造プログラムの他、複数のプロジェクトに参画しており、プロジェクトにおける成果や提言を通じて、我が国のデータセキュリティ戦略の推進と、信頼性のある自由なデータ流通に貢献してまいります。				

Appendix

- ・ 会社概要
- ・ カンパニーハイライト



会社概要



データはもっと自由になれる

ユーザーデータを分散させることで無意味化する「秘密分散」技術を活用したサービスをはじめ、「秘密分散」を基に発展させデータを秘匿化しながら活用できる「秘密計算」技術など、安心・安全からイノベーションを生み出していきます。

また、協業する企業のビジネスをよりスムーズに加速させ、マーケットに新しい機会を生み出し、働き方や暮らし方そのものをポジティブに変えていくことこそが、私たちの使命だと考えます。

会社名	株式会社ZenmuTech
設立	2014年3月4日
代表取締役社長	阿部 泰久
本社所在地	東京都中央区新川2丁目22番1号
従業員数	40名（2026年6月30日時点）
資本金	44,298万円（2026年6月30日時点）
事業内容	秘密分散、秘密計算技術を活用した セキュリティソリューションの開発・販売

暗号化技術を応用した
秘密分散・秘密計算技術を活用した3つのソリューションを展開

第1軸：情報漏洩対策ソリューション

ZENMU Virtual Drive

データを無意味化しPCの利用を安全で快適にする
セキュリティソフトウェア

第2軸：秘密分散ソフトウェア開発キット

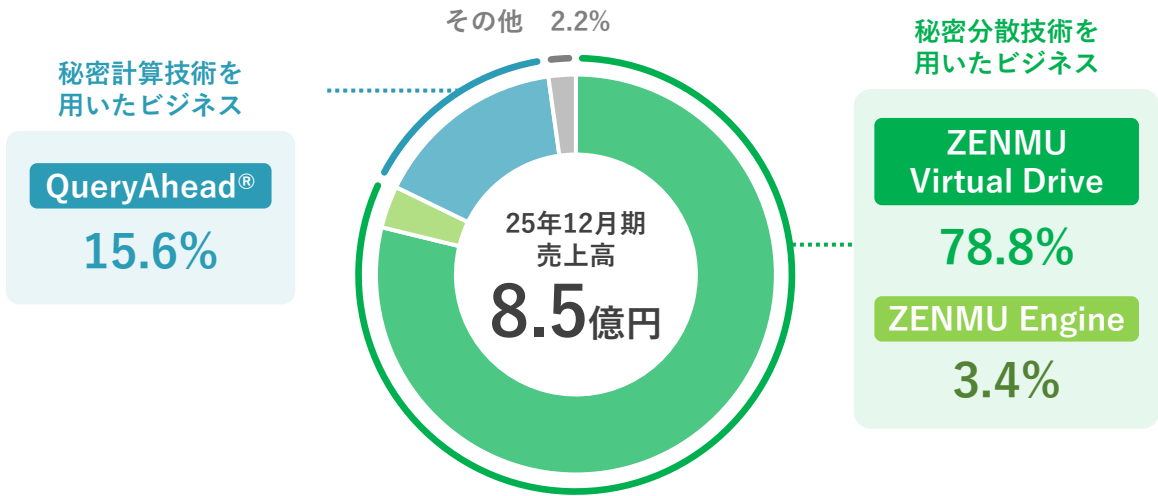
ZENMU Engine

秘密分散技術をプロダクトやアプリケーションに
組み込むためのソフトウェア開発キット

第3軸：秘密計算ソリューション

QueryAhead®

暗号理論などの専門知識不要で秘密計算技術を
プロダクトやアプリケーションに組み込むツール

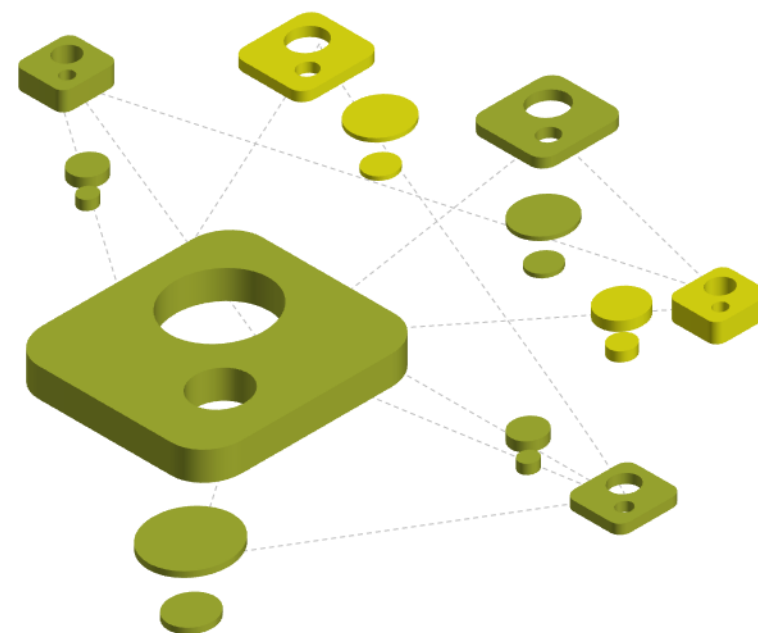


コア技術を活用した 3つのソリューション展開

暗号化技術を応用した秘密分散・秘密計算技術を活用した3つのソリューションを展開

事業	秘密分散ビジネス		秘密計算ビジネス
プロダクト	情報漏洩対策ソリューション ZENMU Virtual Drive (ZVD) 	秘密分散ソフトウェア開発キット ZENMU Engine 	秘密計算ソリューション QueryAhead® 
	データを無意味化しPCの利用を安全で快適にするセキュリティソフトウェア	秘密分散技術をプロダクトやアプリケーションに組み込むためのソフトウェア開発キット	専門知識不要で秘密計算技術をプロダクトやアプリケーションに組み込むツール
事業モデル	サブスクリプション契約による ストック型収益	コンサルティング・システム開発等によるフロー型収益モデル → (将来) ライセンスロイヤリティによるストック型収益モデルへのシフトを目指す	

カンパニーハイライト



コア技術

社会課題を解決する秘密分散/秘密計算技術

安定成長基盤

ZENMU Virtual Driveの優位性と成長性

成長性

ZENMU Engineと秘密計算の成長ポテンシャル

収益モデル

ストック型を中心とした多様な収益モデル

社会課題の解決 テクノロジーを用いてデータと企業や人の活動をセキュリティ上の制約から解放する

データの保護に関する社会課題

社会のニーズ サイバー攻撃による被害は年々増加

課題 より高度なセキュリティが求められる時代に



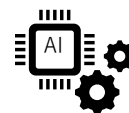
サイバー攻撃関連の通信数(※1)

2014年 約241億 ▶ 2023年 約6,197億

データの利活用に関する社会課題

社会のニーズ AI・機械学習の活用が加速

課題 精度向上のために膨大なデータを使った学習が必要



世界の生成AI市場規模(※2)

2022年 約1.2兆円 ▶ 2030年 約14.2兆円

🔒 従来の、鍵を用いた暗号化技術情報漏えい対策



内部不正や人的ミスによりパスワードなどの鍵とともに暗号化した重要情報が漏えいする事態も



分析、利用時には復号（元のデータを復元）する必要があるためセキュリティリスクが生じる

暗号化技術に代わるセキュリティ技術が求められている

※1：NICT「NICTER観測レポート2023」を基に作成

※2：経済産業省 中部経済産業局「兆しレポート テーマ：生成AIを活用した働き方改革の兆し」

暗号化技術に代わるセキュリティ技術で新たな価値を提供

	一般的な暗号技術	ZenmuTechの取り組み
データの <u>保存時</u> の保護	○ ✓ 従来から暗号化によりデータを保護してきた領域 ✓ パスワードなどの暗号鍵が流出した場合などに解読されるリスクを排除できず<u>セキュリティ上の課題や運用の負担</u>となっている	✓ <u>秘密分散技術</u>でデータ自体を分割した状態で保管や転送をすることで<u>暗号鍵の管理を不要にしセキュリティリスクや運用負担を改善</u> ✓ 分割する（小さくする）ことで保存や通信のコストなどの課題にもアプローチ
データの <u>転送時</u> の保護	○	
データの <u>処理時</u> の保護	× ✓ 暗号化したままでは閲覧や計算はできず<u>データを復元する必要があり漏洩や改ざんのリスクが生じてしまう</u>	✓ 秘密分散技術を応用して<u>データを秘匿化したまま計算する秘密計算技術</u>を研究、事業化へ取り組む

社会課題を解決するコア技術 秘密分散技術

新発想のセキュリティ

サイバーセキュリティ技術は「防ぐ」から「無意味化」へ



社会課題を解決するコア技術 秘密分散技術 ～ZENMU-AONTの特色～

分割前後でデータの総量が変わらないAONT方式を採用し、分散片の小サイズ化、高速化をさらに追求
低速通信環境や記憶容量の少ないデバイスでも利用が可能

当社

All or Nothing Transform方式

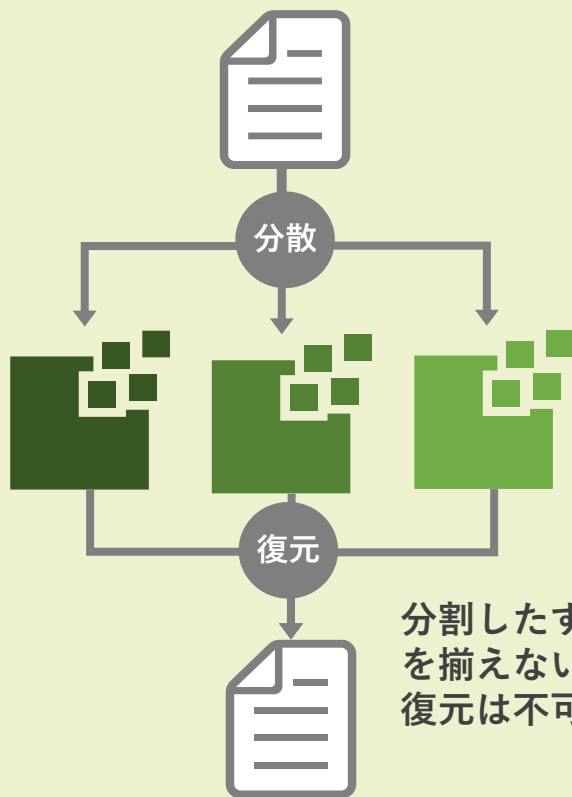
特徴

- ✓ 分散片がすべて揃わないと復元できないためより厳格なセキュリティ性を持つ
- ✓ 分散後の総データ量は元データとほぼ同じ。また、分散片のサイズ比を任意に設定可能（元データ100に対し99:1や33:33:33:1など）
- ✓ しきい値分散と比較して分散・復元の処理速度は高速であり、分散片の一方を小さくすることで通信などに適した運用が可能

独自技術

自社開発
独自の秘密分散アルゴリズム
「ZENMU-AONT」

- AONTの特徴である分散片の小ささを更に追及、最小32バイトまで可能
→ 低速通信環境やエッジデバイスでも利用が可能
- 分散片をより小さくすることで処理速度も更に向上
- 安全性についても理論的検証を実施



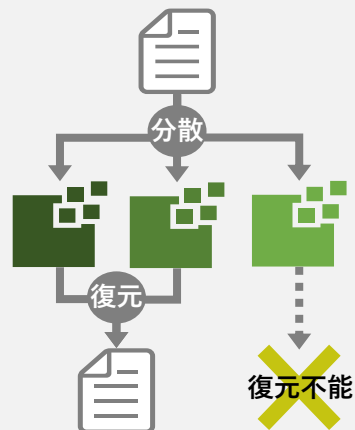
分割したすべての分散片
を揃えないと元データの
復元は不可能

技術としての競合状況 ～有力な競合のいないニッチな技術領域～

秘密分散技術の中ではAONT方式は後発かつ非主流派の理論

主流である「しきい値分散方式」の技術をもつIT大手企業もあるが当社が主力とするPC向けには不向き

主流派 しきい値（閾値）分散方式



例：3個に分散したうち
2個揃えれば復元可能

あらかじめ定めた任意の数（＝しきい値）の
分散片を揃えることで元データの復元が可能
例）2/3、3/4...など

特徴

◎分散片の一部がなくとも復元可能
→重要データのBCP（事業継続計画）
DR（災害復旧）に適している

×分散片一つ一つのサイズは
元データとほぼ同じ

例.3分散すると総データ量は元の約3倍
保存や転送、処理時間が増加

大手IT企業などを中心に
2000年代初め頃から
研究、製品化、普及せず

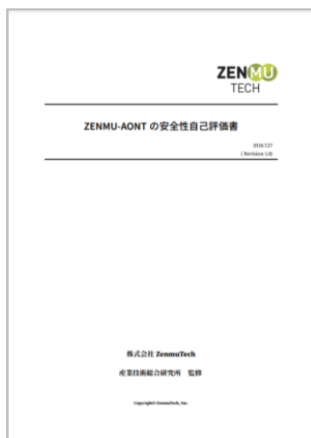
- 必ず3つ以上に分散、それぞれの保管や復元など運用の煩雑さ
- しきい値分散方式の特性により総データ量は増加するため、保存や転送に負担
- PCやモバイルデバイスなどには不向きな方式

参入障壁

- 暗号理論の一分野である秘密分散、その中でも主流でないAONT方式について有力な研究者や企業は限定的
- 主流のしきい値分散方式について技術蓄積のある大手企業の関心は応用技術である「秘密計算」（後述）に関心が移っている
- 当社の特許等によるブロックにより権利侵害を迂回した新規開発が必要
- AONT方式を新たに採用して、新規開発するよりも当社のZENMU Engineを利用したほうが経済的合理性（開発期間の短縮、品質・機能）が高い。

ZENMU-AONTの安全性

産業技術総合研究所の監修のもとZENMU-AONTの安全性自己評価書を作成
共著論文としてまとめ、査読付きの国際学会でも発表



2018年7月27日 産業技術総合研究所監修のもと安全性自己評価書を作成

評価方法

- ✓ Anand Desaiによる攻撃モデルを用いて計算量的安全性※を評価
- ✓ 単に理論上の安全性だけではなくソフトウェアとしての実装実現性と実用性についても評価

結論

理論面と実装面の両方において十分な安全性を有し実用的な方式である

監修コメント

ZENMU-AONT は通常想定される利用形態において安全であるものと判断できる
(産業技術総合研究所サイバーフィジカルセキュリティ研究センター 首席研究員 花岡悟一郎博士)

- ✓ 2019年にはZENMU-AONTのアーキテクチャおよび理論的安全性検証等を産業技術総合研究所との共著論文「An Extended CTRT for AES-256」として発表
- ✓ 暗号・情報セキュリティに関する国際会議であるThe 20th World Conference on Information Security Applications (WISA2019)においてBest Paper Awardを受賞



社会課題を解決するコア技術 秘密計算技術

暗号化や秘密分散により秘匿化されたデータを復号・開示せずに
演算・分析し必要な結果だけを得ることが可能

産業技術総合研究所と
共同で研究開発

現状の課題



- ✓ 企業同士がデータを共有するには機密性の高いデータの取得と共有が障壁
- ✓ 大量のデータを使う場合や、複数企業から学習データを提供される場合、あるいは個人情報などの慎重な取り扱いが必要な場合には、データを一カ所に集めることは大きなリスク

秘密計算技術による解決

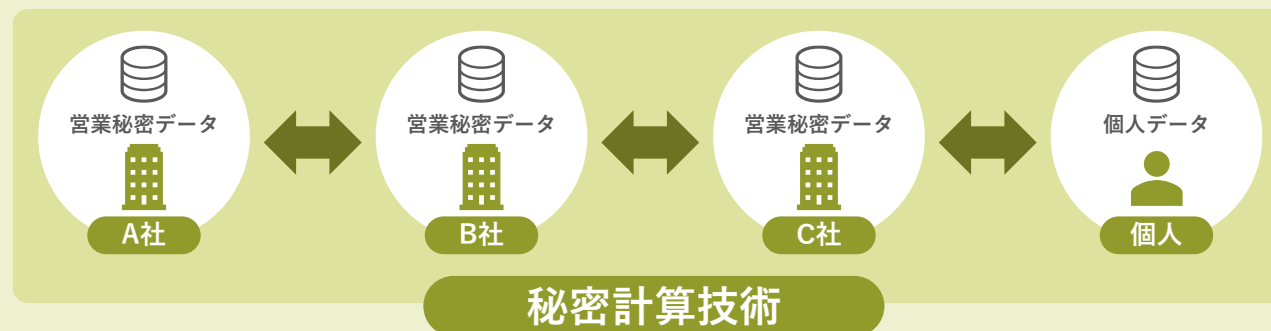
個別化医療

EVインフラ
最適化

金融
不正検知

ものづくり・
物流最適化

電力消費の
見える化



暗号化や秘密分散によって秘匿化したまま計算

- ・ 複数の金融機関の取引情報を結合することによる不正取引検知の精度向上
- ・ ゲノム情報や診療情報を安全に解析することによる創薬やオーダーメイド医療への活用
- ・ 複数の企業を横断し1社単独では困難なサプライチェーン全体の効率化

ビッグデータを秘匿化したままで活用できる秘密計算への期待



コア技術

社会課題を解決する秘密分散/秘密計算技術

安定成長基盤

ZENMU Virtual Driveの優位性と成長性

成長性

ZENMU Engineと秘密計算の成長ポテンシャル

収益モデル

ストック型を中心とした多様な収益モデル

情報漏洩対策ソリューション「ZENMU Virtual Drive」 概要

ZENMU Virtual Drive

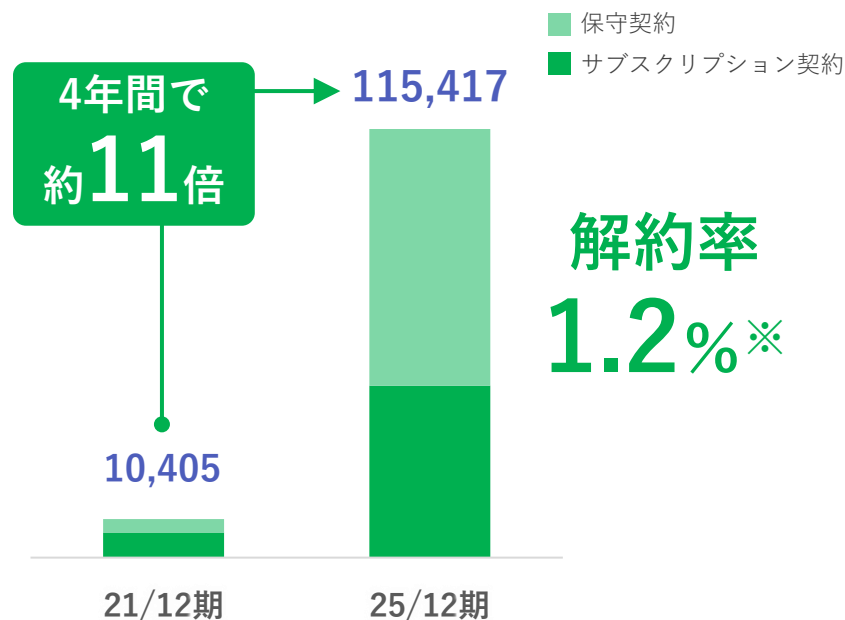


秘密分散技術によりPC内のデータを無意味化して分散、分散片が揃った時のみPC上にデータが復元
既存のソリューションにかわる情報漏洩対策

ZENMU-AONTにより1kbの
分散片を外部保存するだけで
PC内のデータを無意味化
通信環境への依存度が高い
従来ソリューションに対し、
オフラインや低速環境でも
PCを快適に使用可能



ZENMU Virtual Drive ライセンス数



データ保護ができる

PC紛失の際にも、本人や管理者が分散ファイルへのアクセス停止をおこなうことPCへのアクセス防止が可能

働く場所に依存せず 快適に仕事ができる

分散片はスマホやUSBメモリーでも同期可能なので、ネットワーク環境に頼らずオフラインでも安定して利用可能

管理者負担が軽く コストも低減

重厚なサーバーやネットワークが不要なので、管理者の負担が軽く導入、運用のコストも縮小

企業規模に依存しない

FAT-PC形式で対応可能で導入、運用のコストが低いので小規模企業でも導入可能

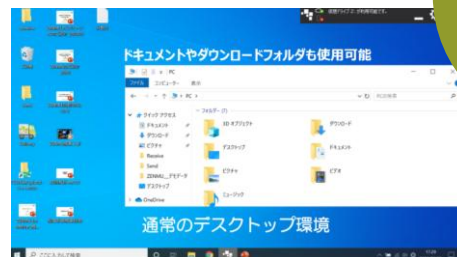
短期間で 利用開始が可能

ポリシー設定のみで、導入決定から1ヶ月程度で利用可能

情報漏洩対策ソリューション「ZENMU Virtual Drive」概要

秘密分散技術によりPC内のデータをPCとクラウドに分散

分散片が揃った時のみPC上にデータが復元

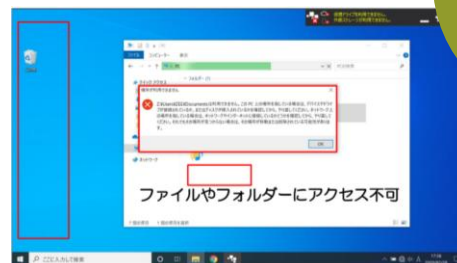
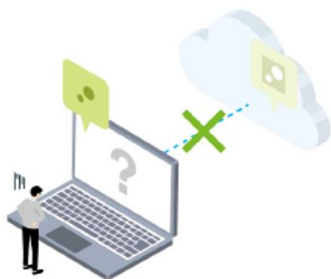


クラウド上の分散ファイルと合わせてデータを復元



PCの紛失・盗難時にはユーザー本人または社内管理者がクラウド上の分散片へのアクセスを遮断

分散片が揃わないとPC上では何も見えない状態



未接続時、PC内には無意味な分散ファイルのみ

- ✓ クラウドに保存する分散片のサイズは1kbと小さく、低速通信環境やクラウドへのアクセス集中時でも影響をうけない

競合するVDIやデータレスPCは画面転送やファイルの転送を行うため通信量が大きく通信回線やサーバーの状況によってパフォーマンスが低下

- ✓ 紛失・盗難後、PCが回収できた場合にはクラウド側へのアクセスを再開することで元のデータをそのまま利用可能

PCにデータ消去指示を送る遠隔消去ツールは成功率に課題。また、消去後の復元も不可能

- ✓ クラウドへのアクセスログから紛失・盗難中の不正アクセスの有無自体を把握可能

情報漏洩がなかったことの証明が可能

市場動向 「ZENMU Virtual Drive」 ニーズの高まり

コロナ禍以降のリモートワークの拡大、定着にともない業務用PC持出時のセキュリティ対策への需要も拡大
従来のPC向け情報漏洩対策ソリューションの課題に応えるセキュアFATに需要が高まる

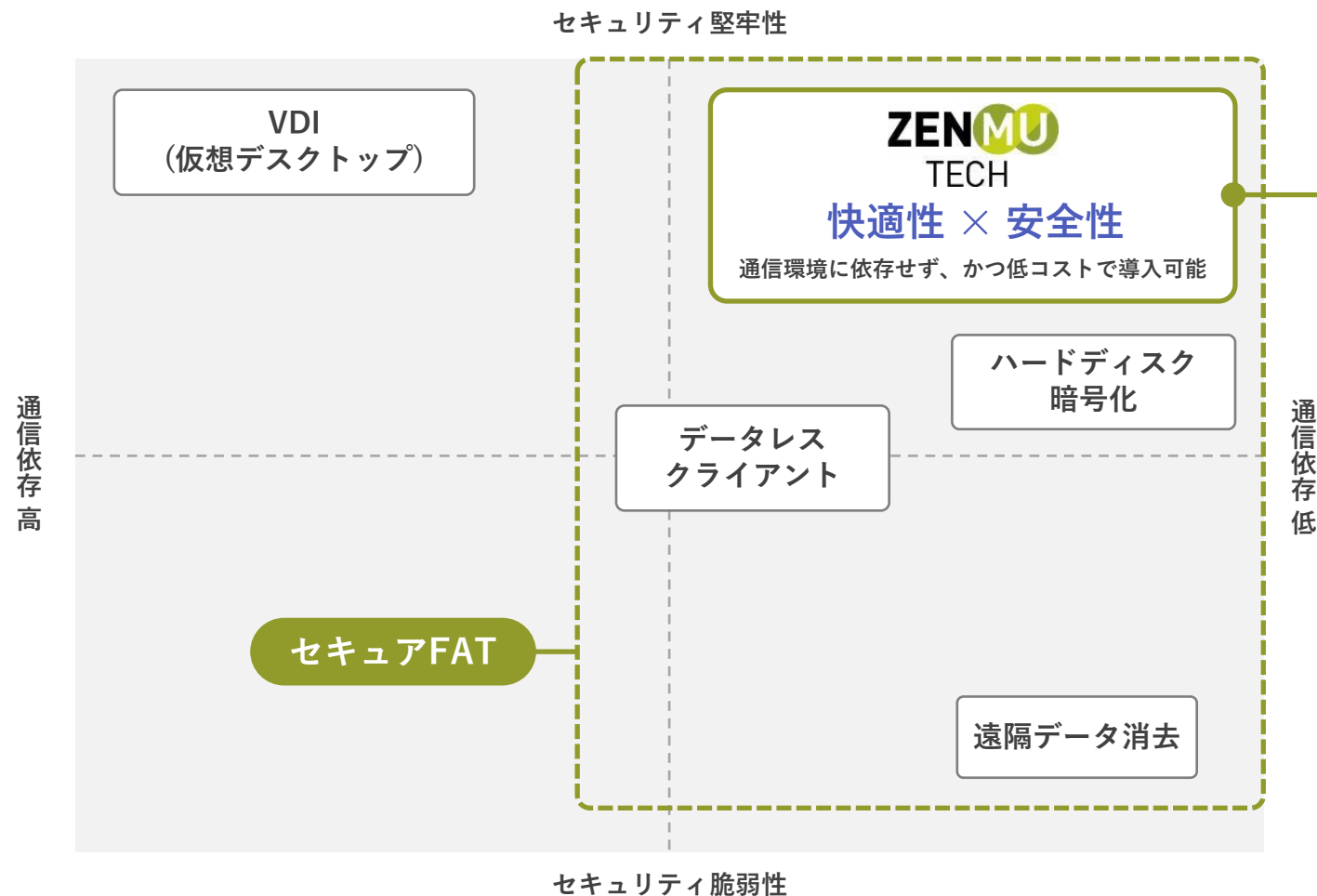


※1：シンクライアント…企業などの情報システムにおいて、ユーザーが使うPC等のクライアント端末に必要最小限の処理をさせ、ほとんどの処理をサーバー側に集中させることでソフトウェアやデータなどの資源を管理

※2：VDI…デスクトップ環境を仮想化してサーバー上に集約したものであり、利用者はシンクライアントPCからネットワークを通じてサーバー上の仮想マシンに接続し、デスクトップ画面を呼び出して操作

プロダクトポジショニング①

「ZENMU Virtual Drive」はVDIのデメリットを解消
且つ、通信依存度の低さからなる快適性と低コスト、安全性を両立



✓ 快適性

AONTの特性を活かし1kbの分散片のみクラウド上に保存。通信速度やサーバーの処理能力に依存せずに利用できるため低速環境やネットワークのアクセス集中による影響を受けにくい

✓ 安全性

秘密分散技術によりデータを無意味化してPC内とクラウドに分散保管するため、クラウドの接続をロックすればPC内のデータは無意味なものとなり、盗難・紛失時も情報漏洩を防ぐことができる

✓ 低コスト

クラウド基盤のサービスのため、サーバーの新規購入や設計・構築費用等は一切不要
自社開発であるため海外製品と比べライセンスも相対的に安価

プロダクトポジショニング②

「ZENMU Virtual Drive」はVDIのデメリットを解消
且つ、通信依存度の低さからなる快適性と低コスト、安全性を両立

プロダクト	VDI（シンククライアント）	データレスクライアント	ZENMU Virtual Drive
概要	サーバー上でデータを処理、保存し 手元の端末に画面転送	PC内でデータを処理するが データはサーバー上に保存	PC内でデータを処理し PCとクラウドに分散保管
安全性	データは端末上には一切存在しない	データはPC上に残らないが、 キャッシュが残る場合もある	PC内には 無意味な分散ファイルのみ
操作の快適性 パフォーマンス	画面転送のため通信量が大きく 通信環境およびサーバーの処理能力に 左右される。サーバーへのアクセス 集中などによりパフォーマンス低下	処理は通常のPCとほぼ同等、 データの読み書きは通信環境に依存	通常のPCとほぼ同等 サーバー等外部との接続は 1kbの分散片のみ
1 ユーザー あたりの費用	オンプレで年額250,000円程度 クラウドで年額50,000～100,000円程度	年額10,000～25,000円程度、 他にサーバーコストも必要	年額 21,600円
通信環境への 依存度	通信環境のない場所では 利用できない	基本的に通信環境のない場所では 利用できない	通信環境に依存しない オフラインでも利用可能

導入事例（大手コンサル企業グループ）

A社

VDI下のパフォーマンスに大きな不満、
業種柄、移動が多くネットワーク品質に左右される余地が大きい
→ 導入後の利用者アンケートはおおむね好評、現在2万4,000ライセンスまで拡大

導入前

✕ グループ各社で業務内容、業務用アプリが異なるため必要な性能に応じたVDI環境の設定が必要。
煩雑かつコストの制約から対応に限界

✕ 業務・拠点の関係で小刻みな移動が多く、
VDIのセッション切れで時間ロスが大きい

✕ パフォーマンスに対する潜在的な不満がある



導入後

✓ 端末のセキュリティコスト削減
VDIサーバーも移行完了時には撤廃の方針

✓ 移動時の起動や操作の点で従来より
パフォーマンス向上、
ユーザアンケートでは9割が評価

✓ VDI同等のセキュリティを確保しながら、
パフォーマンスは改善

ZENMU Virtual Driveの優位性と成長性

既存の国内VDI市場は800万人規模、リモートワーク/ハイブリッドワークの定着により安定成長見込
ZVDはVDIに対する優位性をばねに市場を獲得していく

800万人以上の国内VDIユーザーに対し現時点での
ZENMU Virtual Driveのユーザー数は約1%と獲得余地は大きい

国内の全ホワイトカラー
2,700万人※1

国内VDIユーザー数
802万人※2

ZENMU Virtual Drive
ユーザー数
10万人※3

対 VDI市場戦略（置き換え、共存戦略）

セキュリティの高さの反面、サーバー、ネットワークまで含めたコストの高さや、ユーザーの生産性に課題

➡ 低コスト、通信依存の低さによる快適な生産性を訴求

対 非VDI市場戦略

PC内のデータ保護に対する需要はあるが
コストや導入・運用の負担からセキュリティ手つかず

➡ 低コスト、簡便性など導入・運用のしやすさを訴求

※1：労働力調査（令和5年総務省）の基づく全就労者数と国勢調査（令和2年）に基づくホワイトカラー比率から推計。

※2：VDIユーザー数:2024年実績値 2025年5月IDC市場予測資料

※3：2024年12月現在、買い切りライセンスによる保守契約を含む

ZENMU Virtual Driveの製品としての課題と今後のロードマップ

ZENMU Virtual Drive

ZENMU
TECH

課題① マルチデバイス対応

VDIの利点としてサーバーにデータが集約しているためどのPCからアクセスしても同じ環境、同じデータが使用可能

一方でZENMU Virtual DriveはPC内と外部デバイスにわけて保管している分散片を結合して復元するためPCの使いわけは不可能

対応策 ネットワーク／クラウドデータ保護製品の開発

今後の通信環境の向上を見据えてPC内ではなくクラウド側のデータを秘密分散で保護する製品を企画中。PCだけでなくスマートフォンやタブレットでも同じデータに接続可能なマルチデバイス対応を実現

ZENMU Virtual Drive
＝ローカルデータ（PC内のデータ）を保護



通信環境の 飛躍的向上

新製品計画
秘密分散ストレージ



ネットワーク／クラウド
データ保護

課題② セキュリティとしての限定的な用途

ZENMU Virtual Driveのセキュリティとしての提供価値は紛失、盗難時などへの漏洩防止がメインでありマルウェア対策やデバイス管理などエンドポイントセキュリティとして求められる機能の一部にとどまる

対応策 連携製品の拡大によるトータルソリューション化

デバイス管理、バックアップ、認証など他社のセキュリティ製品との同時利用により総合的なセキュリティを実現を図る

2024年12月に設立された複数のセキュリティ企業によるトラストセキュリティコンソーシアムに参加。単一製品ではないことを活かしユーザーのセキュリティ方針や運用に合わせた組み合わせ提案により営業面でも連携

コア技術

社会課題を解決する秘密分散/秘密計算技術

安定成長基盤

ZENMU Virtual Driveの優位性と成長性

成長性

ZENMU Engineと秘密計算の成長ポテンシャル

収益モデル

ストック型を中心とした多様な収益モデル

秘密分散ソフトウェア開発キット「ZENMU Engine」 概要

自社開発の秘密分散技術「ZENMU-AONT」をソフトウェア開発キット（SDK）※として提供
秘密分散技術を他社のプロダクトやアプリケーションに組み込むことが可能

セキュリティやコストの問題を解決する
新たなソリューションを開発して
使用又は販売したい



DEVELOPER

SDKとしての提供価値

- ✓ 開発時間の短縮
- ✓ 品質や開発コスト

ZENMU-AONTを組み込むメリット



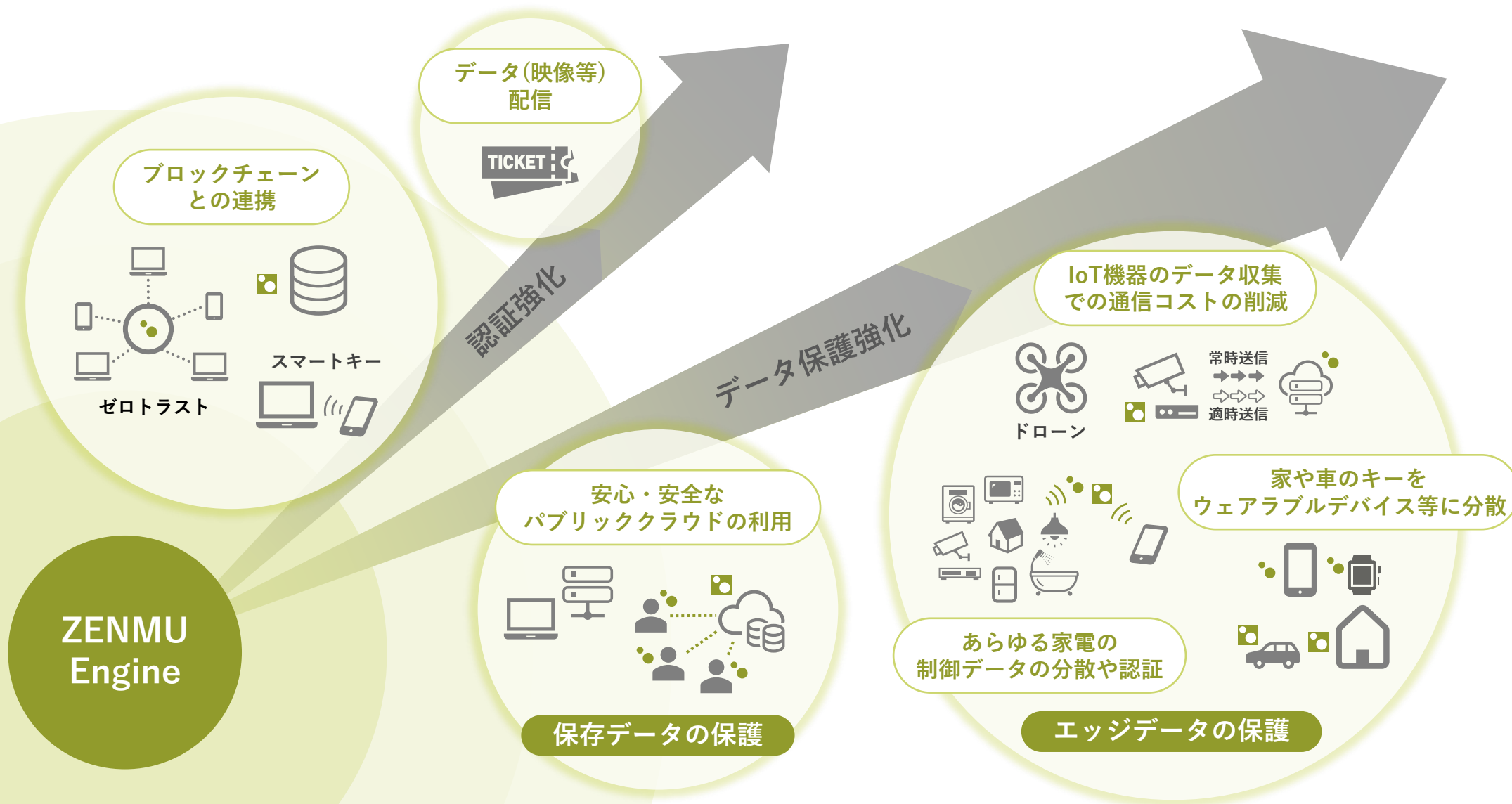
ZENMU Engineを組み込むだけで
秘密分散機能を実装

ひとかたまりで保管、通信する暗号化に対して分散（小さく分割）することで
セキュリティ課題だけでなく保管、通信上の課題にもアプローチが可能

ZENMU Engine 組み入れ適用例

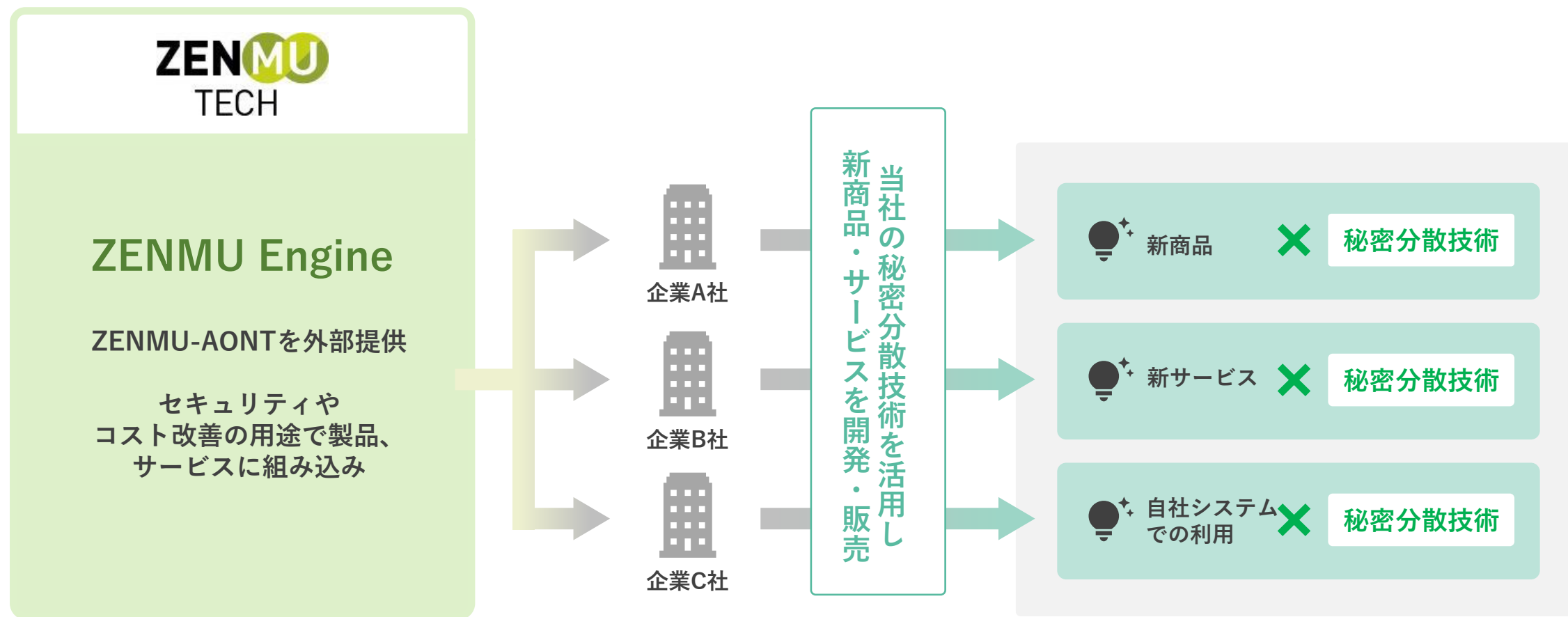
ZENMU Engine

ZENMU
TECH



当社のコア技術とアライアンス戦略で新たなサービス・商品の創出支援

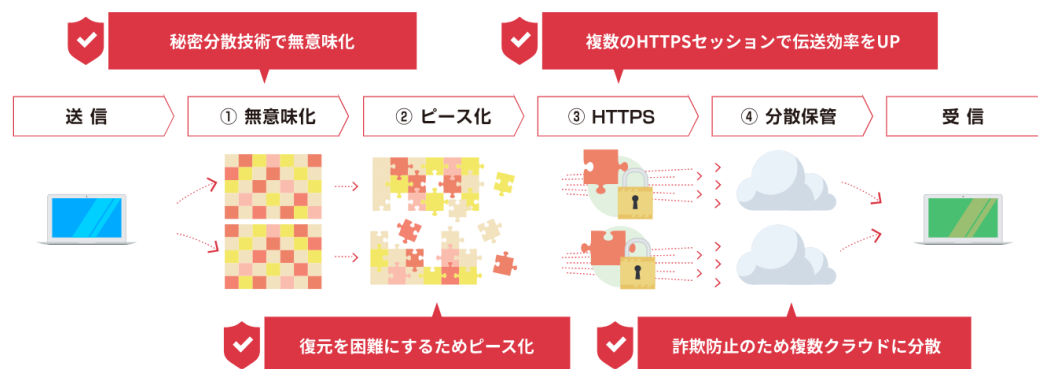
ZENMU-AONTを利用しセキュリティ課題やセキュリティコストを改善するソリューションを創出
販売収益からロイヤルティを獲得



HITACHI
Inspire the Next

日立システムズ グローバルセキュア転送サービス

秘密分散を含めた4重のセキュリティ技術で
高価な専用線を必要とせず安心な拠点間転送を実現



海外の製造・開発拠点などへの図面・CADデータ転送を安全かつ容易に。クラウドストレージへのセキュリティ面での不安解消や物理輸送や高価な専用回線に代わりコスト削減にも効果

HITACHI
Inspire the Next

日立システムズ 秘密分散フォービデオ

監視カメラ映像を安全にクラウドに分散保管、
カメラの稼働状況を24時間365日体制で監視



プライバシー含む撮影データを安全にクラウドに分散保管

「ZENMU Engine」 適用領域の市場規模

ZENMU Engine



ZENMU-AONTを用いた暗号化とは別のアプローチでセキュリティ課題を解決し市場拡大への貢献を図る



車載データ保護・
管理

市場ポテンシャル

約**173**億ドル^(※1)

2030年(世界市場)
※スマートキー



ブロックチェーンと
様々なコンテンツの
組み合わせ・管理

市場ポテンシャル

約**2,520**億ドル^(※2)

2034年(国内市場)



防犯カメラ内データ
の保護

市場ポテンシャル

約**4,362**億円^(※3)

2030年(国内市場)



ドローン内の
データ保護

市場ポテンシャル

約**9,054**億円^(※4)

2028年(国内市場)

※1： TechNavio. 「自動車用スマートキーの世界市場」

※3： 矢野経済研究所 「2025年度 監視カメラ／画像解析システム市場の実態と展望」

※2： マーケットリサーチセンター「ブロックチェーンの日本市場（2026年～2034年）」

※4： インプレス総合研究所「ドローンビジネス調査報告書2024」

成長分野のドローン市場で実証試験に成功

アライアンスパートナーであるネクストウェア株式会社と株式会社アイ・ロボティクスと共に、ドローンや移動型ロボットに搭載する技術「インテグリティ・ドローン」の実証試験に成功

市場課題

産業領域や物流領域における有翼型・マルチコプター型の無人航空機であるドローンの活用の用途の広がり

災害時の情報収集等に警察・消防でもドローンや自律移動型ロボットの導入が推進される※

ドローン、ロボットの機体には、自律移動用のプログラムや飛行経路の情報、撮影したデータ等の機密情報を多数含んでおり、予期せぬ落下等の事故による情報漏洩のリスクがある

ZENMU Engine活用による解決



秘密分散ソリューションを組み込むことで
ドローンのデータを瞬時に無意味化し情報漏洩を防止

実証試験の結果、秘密分散技術が安価・軽量・鍵管理不要かつ既存ドローンへの後付けが可能であることが明らかに
産業現場への即時導入が期待できる実践的な
セキュリティソリューションとなることを証明

実用化に向けて、専用チップの開発、ソフトウェアSDKの提供、標準化推進を通じた産業界への広範な展開を目指す

秘密計算ソリューション「QueryAhead®」概要

秘匿性の高いデータを秘密分散により分割、無意味化したまま計算
暗号技術や秘密計算の専門知識を持たずともアプリケーションに
組み込んで利用することが可能



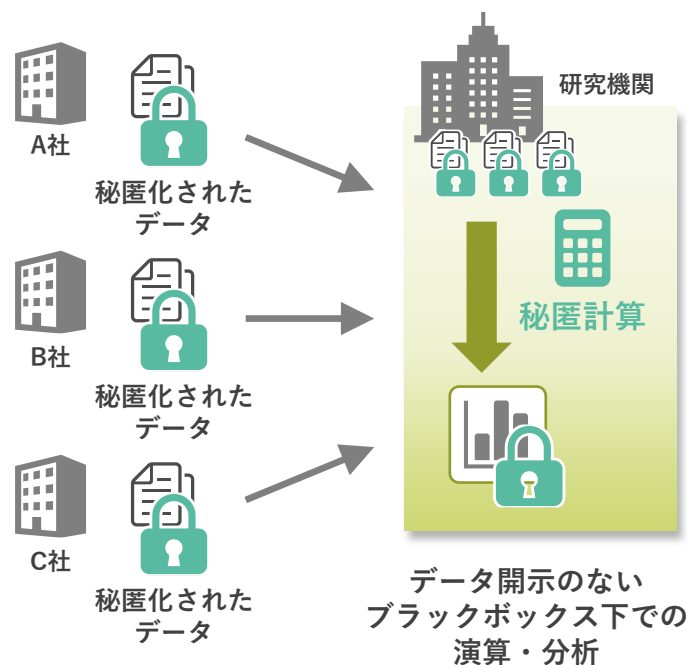
産業技術総合研究所と
共同で研究開発

データ活用における課題

- ✓ 個人情報など秘匿性の高いデータの利活用の促進がハードルが高く進まない
- ✓ 他企業協業によるイノベーションをしたいが、機密データの情報共有がボトルネック
- ✓ 秘匿性の高いデータを第三者が分析する際に、漏洩や改ざんのリスクが発生



QueryAhead®によるソリューション



暗号化したデータを
復号することなく
計算処理を実行

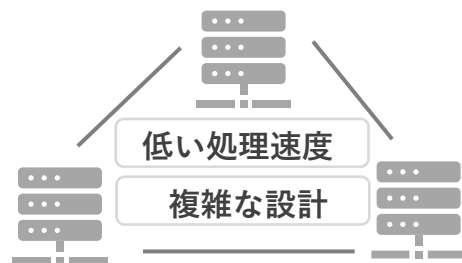
暗号技術などの専門知識は不要
PythonとSQLでクエリ可能

社内でのデータ利活用から
外部組織との連携まで
幅広い用途で利用

産業技術総合研究所との協力で秘密計算市場をリード

産業技術総合研究所の新技术 × 当社の秘密分散技術事業化の実績を活かし秘密計算技術の実用化を目指す

秘密計算実用化における課題



- 計算処理が複雑であるため、演算処理が遅い
- ▼
- 高速化のためコンピュータ3台を連携させる方法が主流、システム設計が複雑化するほか高い導入コストがかかる

導入障壁が高い

産業技術総合研究所の技術



世界最速の秘密計算技術を実現※1

2台のコンピュータ構成で計算を高速化する新技术の開発に取り組み、秘密計算の基本的な処理工程を従来の100倍以上高速にすることに成功



当社の技術

産業技術総合研究所の新技术を「QueryAhead®」に実装

暗号技術の知識がなくてもシステム構築できるような仕組みを実現

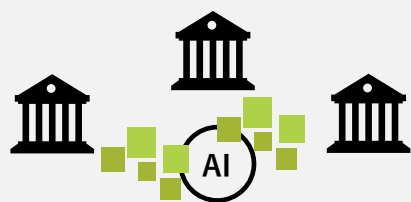
導入障壁を
緩和し
秘密計算の
事業化を促進

※1：計算サーバが2台における特定の場合に、世界最速の計算速度を達成した。（詳細はこちらの論文で発表している。Nuttapong Attrapadung, Goichiro Hanaoka, Takahiro Matsuda, Hiraku Morita, Kazuma Ohara, Jacob C. N. Schuldt, Tadanori Teruya, and Kazunari Tozawa. 2021. Oblivious Linear Group Actions and Applications. In Proceedings of the 2021 ACM SIGSAC Conference on Computer and Communications Security (CCS '21). Association for Computing Machinery, New York, NY, USA, 630–650. <https://doi.org/10.1145/3460120.3484584>)

秘密計算「QueryAhead®」適用領域

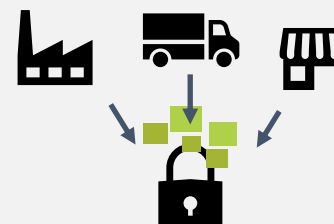
AI・機械学習の活用に伴い、複数の企業などから大量の機密データを一か所に集めて活用
新サービス創出による売上拡大や研究開発、製造コストの改善に寄与することでマネタイズを図る

適用領域の一例



金融・不動産

各銀行が持つ取引データを秘匿化したまま不正検知AIモデルを構築し、共同利用することで業界全体で不正防止を進めることが可能
不動産分野では互いに情報を伏せたまま秘匿マッチングなどに期待



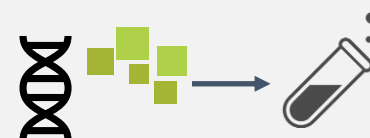
製造・物流

サプライチェーンを構成する企業全体に秘密計算を適用し、各社の機密は維持したまま、企業をまたいでボトルネックを可視化し、購買、製造、物流の多岐にわたって最適化することにより競争力を向上させる



材料開発

個別のデータを秘匿化したまま企業間を越えたデータ連携を行いAIによる実験モデルの精度を向上。
開発期間を大幅に加速しコスト改善や競争力向上につなげる



ヘルスケア

個人情報を含んでいるDNA情報や疾病情報などを各医療機関、製薬会社等とデータを秘匿化したまま共有、分析することで、より最適な創薬や医療サービスが提供できる可能性

コア技術

社会課題を解決する秘密分散/秘密計算技術

安定成長基盤

ZENMU Virtual Driveの優位性と成長性

成長性

ZENMU Engineと秘密計算の成長ポテンシャル

収益モデル

ストック型を中心とした多様な収益モデル

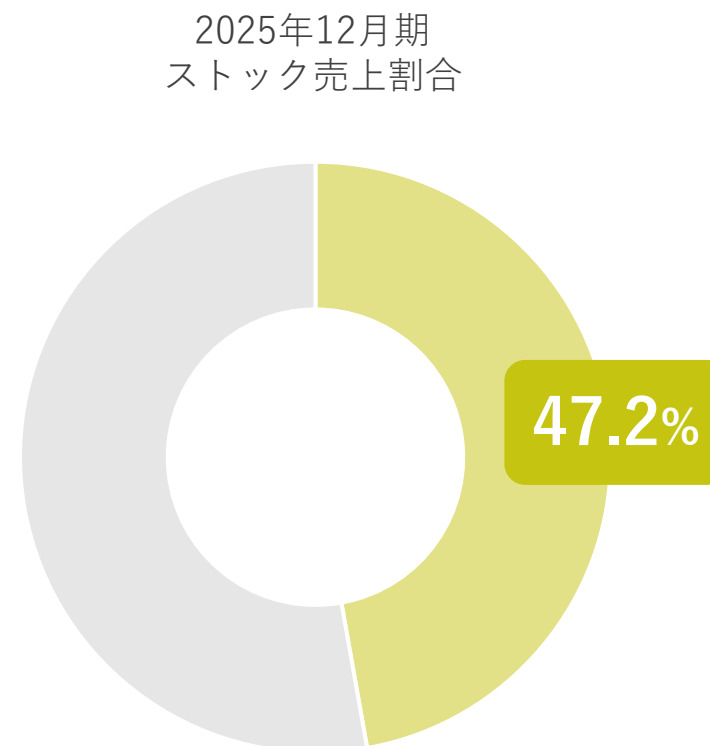
ZENMU Virtual Driveのストック型収益を主力とした多様な収益モデル

ソリューション	ZENMU Virtual Drive		ZENMU Engine		QueryAhead®
	ストック型	フロー型	ストック型	フロー型	フロー型
収益モデル	✓ライセンス利用に伴う保守契約 ✓ライセンス契約と保守契約、アップデート対応が一体となったサブスクリプション契約	✓ライセンスのみの一括販売契約	✓ライセンス利用に伴う保守契約 ✓OEM商品の売上に伴うロイヤリティ契約	✓ライセンスのみの一括販売契約 ✓OEM商品を開発する際のコンサルティング契約	✓試用ライセンスの販売契約 ✓PoCや実証研究などの受託役務
売上に占める割合 (2025年12月期)	78%		3%		15%

ストック型収益をメイン安定的に収益拡大

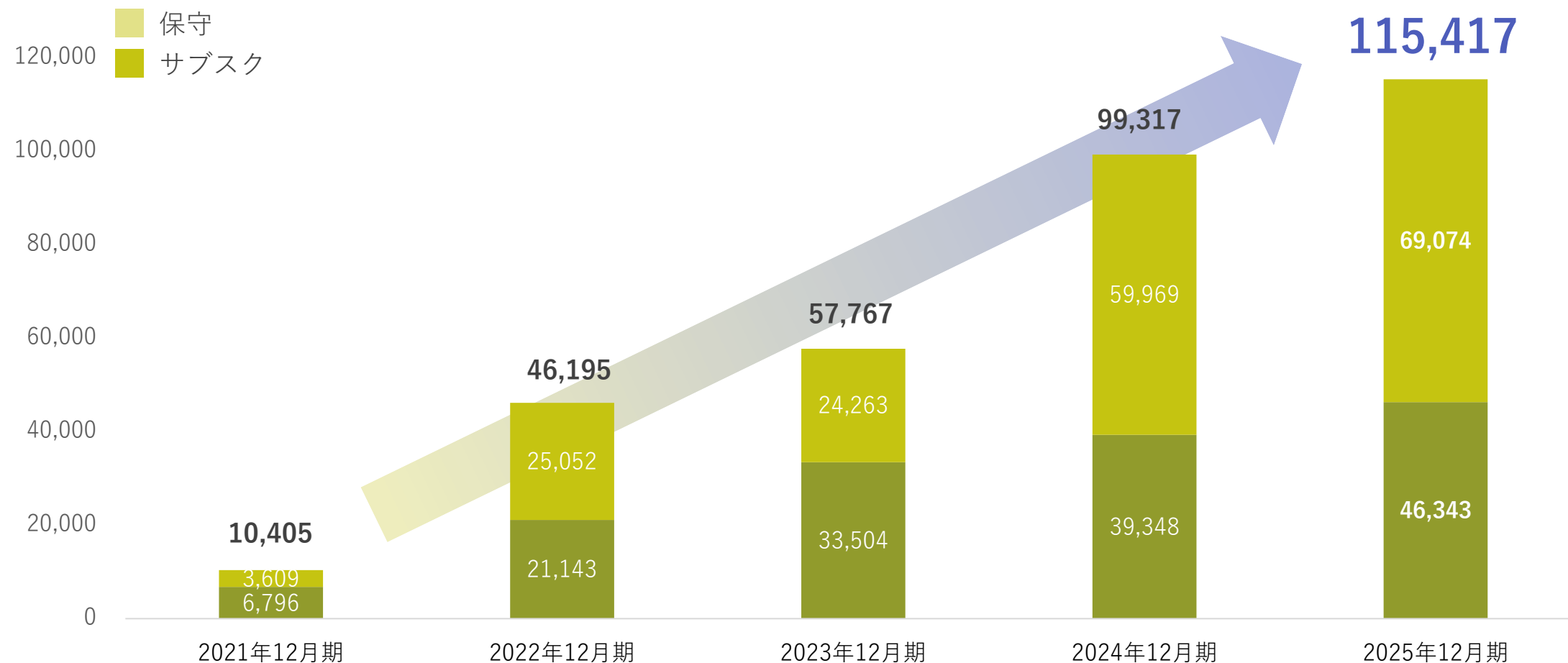
2025年12月期は、2件の大型案件受注により一時的にフロー売上が増加したものの、依然としてストック売上は全体のうち約4割を占める

	2023/12期	2024/12期	2025/12期
ストック売上高	192百万円	278百万円	402百万円
フロー売上高	248百万円	370百万円	449百万円
売上高合計	440百万円	648百万円	851百万円

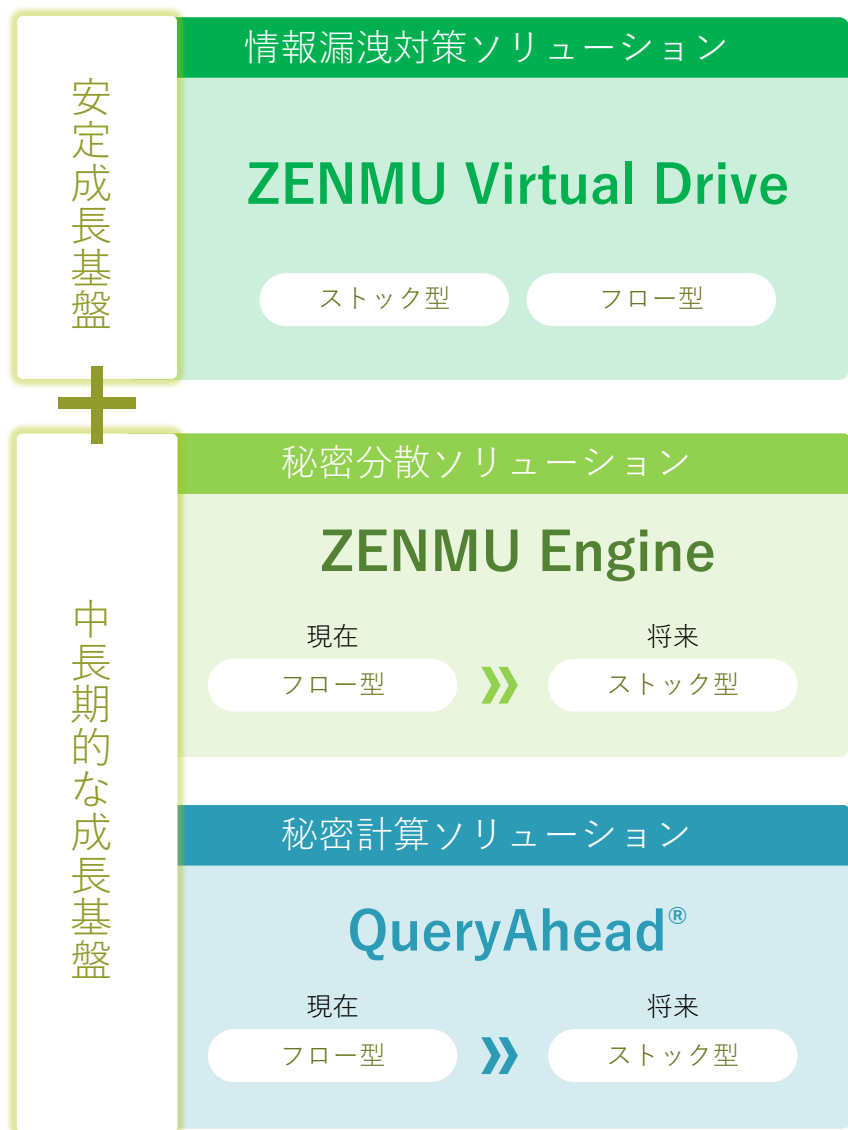


ストック型収益の源泉であるZVDのライセンス数は大きく増加

1社あたり1万ライセンスを超える大規模利用顧客の増加によりZVDのライセンス数が2022年12月期以降、大きく増加しストック売上の基盤を形成

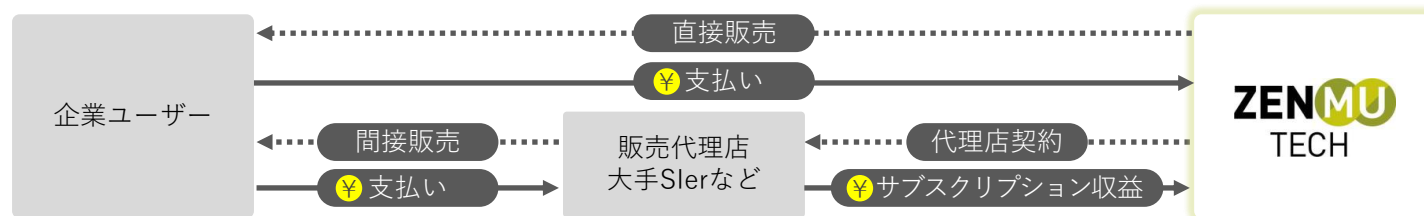


ソリューション別収益モデル

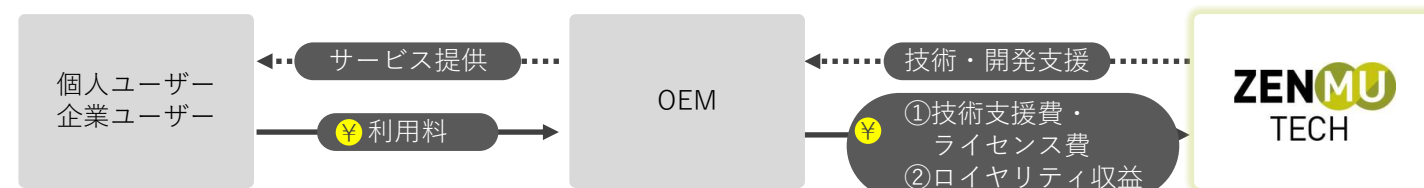


システム更新などのPC買い替え時に、販売代理店による間接販売で導入を拡大、サブスクリプション収益を獲得

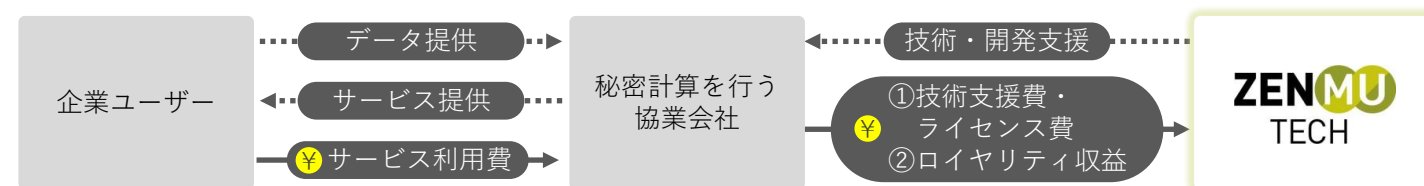
※要望があればOEM商品開発のための当社の技術者によるコンサルティング費用発生



ZENMU Engineを各社の製品・サービスに組み込むプログラムとして外部提供、オープンイノベーションを通じて新事業・新サービスを協創、ロイヤリティ収益を獲得



PoCや受託開発などで協業会社による事業化支援を実施しつつ
将来的には協業会社からロイヤリティ収益獲得



財務ハイライト

損益計算書（単位：百万円）	2022年12月期	2023年12月期	2024年12月期	2025年12月期
売上高	232	440	648	851
売上原価	23	30	60	85
売上総利益	208	410	588	766
販管費	332	363	512	622
営業利益	△124	46	76	144
経常利益	△113	56	84	160
当期純利益	△115	72	78	155

貸借対照表（単位：百万円）	2022年12月期	2023年12月期	2024年12月期	2025年12月期
資産合計	128	577	656	1,286
流動資産	120	536	603	1,173
固定資産	8	41	53	113
負債合計	284	420	419	471
流動負債	259	402	407	471
固定負債	25	18	11	-
純資産合計	△155	156	237	814
自己資本比率（％）	-	26.2%	35.4%	62.9%

キャッシュフロー計算書（単位：百万円）	2022年12月期	2023年12月期	2024年12月期	2025年12月期
営業キャッシュフロー	51	9	242	△27
投資キャッシュフロー	△2	△17	△21	△65
財務キャッシュフロー	△7	232	△22	373
フリーキャッシュフロー	48	△8	221	△92
現金同等物の期末残高	83	308	507	788

本資料において提供される情報は、いわゆる「見通し情報」を含みます。これらは、現在における見込み、予測及びリスクを伴う想定に基づくものであり、実質的にこれらの記述とは異なる結果を招き得る不確実性を含んでおります。

それらリスクや不確実性には、業界並びに市場の景況、金利や物価、為替変動といった一般的な国内及び国際的な経済状況が含まれます。

今後、新しい情報・将来の出来事等があった場合であっても、当社は、本資料に含まれる「見通し情報」の更新・修正を行う義務を負うものではありません。